

諏訪神社下社

松本城

会田郷

上田城

生島足島神社

第一四二回

史料

(長野県)

海野宿

主催 越谷市郷土研究会
案内人 山崎善司

第一回 史跡ぬぐり案内（余田氏のルーツを探る）

集 と
合 き

昭和六十年十月六・七日(日・月)
越谷駅前バスターミナル広場

午前五時五十分
集合出發

宿行
泊先

長野県東筑摩郡四賀村字余田「広田寺」 〇一六三一六四一一一〇一
越谷駅前 一主都高速 一中央高速 一諏訪インター 下諏訪神社秋社
松本城 一 一星 食 一 一四賀村余田広田寺 一宿泊「松茸山荘」
七日午前八時三〇分出発 「松茸山荘」 一上田城 一生島足島神社
食 一 一海野宿 一輕井沢 一碓氷峠 一高崎 一館林 一越谷
教 一 一(長距離の為着時間は確定出来ませんが、午後六時~七時)

主
編

案內者
會費

越谷市郷土研究会
山崎善司副、
一一〇〇田也、
越谷市弥生町一一九
越谷市郷土研究会

卷之三

合〇四八九一六二一三七三三
〇〇〇円也

一一一、〇〇〇田也、但し、会員は、一一〇、〇〇〇田也
越谷市弥生町一一九 山崎善司方 連絡所 〇四八九

四八九一六二一三七三三

越谷市郷土研究会

主編趙谷
研究員

連絡先 越谷市弥生町一十九

四六一三七三三山崎善同万

少 喜 小 詞

諏訪神社

諏訪の事が國の記録に出て来るのは、奈良時代に記された「古事記」である。出雲の国ゆすり神話の中で、「父大国主命が國譲りの交渉を認めたが、健御名方命は不服で、天照大神の使者、健御雷命と争い、敗れて須波湖の辺りまで逃げて来て捕わる。そしてこの地より絶対に外に出ない事を約束して許された」とある。

この神話は、出雲文化が諏訪に流入した事を物語るものであるが、

鎌倉時代宝治三年（一二四九）「大祝信重解状」・室町期「諏訪明神縁起絵巻」の記事中に、明神健御名方命が入諏する時、地元の守矢神がこれを妨げて、天竜川出口の三沢藤島社と橋原洩矢社の辺りで、明神は藤の枝で、守矢神は鉄のカギを持つて相争つた、然し明神が勝ち、その後は守矢神は神長官として明神に仕える様になつたという神話である。

信濃国造家の祖先は、神武天皇の皇子神八井耳命を祖とする。氏族は、十九支族を数え、広く全國に分布する勢力を持つていた。

でもあつた。

金刺舎人は欽明天皇の磯城金刺宮に（五三九（七一）（金明天皇は金刺氏出の女の子？）に仕える信濃国造家の人物である。
貞観五年（八六二）信濃國諏訪郡人、右近将監正五位上、金刺舎人広長が太朝臣姓（オオノ）を賜る。
太安萬呂（七二三年没）（古事記の編者）と金刺舎人氏とは同族である。諏訪神社の大祝（オオハフリ）である。

◎大神＝神氏を称し、ミソギ祝を名のり、奈良時代未

頃、皇子が入諏した。この皇子が有員大祝と言ひ、居館を諏訪の四賀普門寺に造営した。

◎大祝＝代々即位式を行う事により大祝（オオハフリ

）となる。茅野宮川の前宮社が神殿（コウドノ）（居館）であつた。即位式は前宮社内の鷦冠社（楓の宮・柊の宮とも称す）にて行う

幼童は「神がかり」となり政治的判断を託宣する。この託宣を聞き取るのは神長である。大祝が成長すると、位を次の幼童に譲る。

持統天皇五年（六九一）（天武天皇の皇后）天皇は須波神に天候回復祈願の勅使を派遣す。朝廷の諏訪信仰が天候上の事ばかりでなく、東山道にある「荒ぶる神の国」の懷柔策とみえる。当時まだ東国には「まつらはぬ」国々も多く、東山道は陸奥鎮守府までの近道

ミシヤグジ社（御社宮司社）

ミソギ大祝有員（オオハフリアリカズ）

諏訪上社、大祝の始祖「有員」の屋敷跡と言う跡がある。諏訪市四賀普門寺の山麓赤津川の扇状地上で、旧甲州街道を目の下に見る平坦地である。

扇状中央部には、ミシヤグジ社（御社宮司社・萩宮社）が檜の巨木の根元に、祭られ石棒と丸石が藏されている。祭神については、寛正五年（一四六四）の守矢神長満実書留には、諏訪社の王子であると述べられているが、古くは大同年間（八〇六）にミソギ祝となつた「有員」の住居と言わわれている。

この屋敷社の北方、やゝ小高い場所に、大祝有員の靈廟と言われているミソギ社（御曾儀社）が、小さな茅葺き社に祭られている。祭日は、毎年酉の祭りの翌日、大祝家を祭主として祭つて来ている。祭日には、大祝以下の行列は長槍・幟旗を立て、ミソギ社下方の籬（マガキ）大夫屋敷（増沢家）にて休憩し、太夫の案内で、（籬大夫とは、「有員親王」の従者として、従つ来た人物と言う。）ミソギ社に参拝している。



ミシヤグジ神社の御神体・石棒

上社大祝の始祖「有員」とは、何如なる人物であろうか。前田家本（加賀藩）神氏（ミワウジ）系図によると、大祝有員は「明神」を奉じて諏訪に入り、土着の守矢神を従えて諏訪を統一し、守矢山麓に社壇を構え諏訪神社とした。

この時「有員」は八歳の童子で、明神は「我には体がない、故にこの衣を着た大祝をして、我（明神）とせよ」と神秘的な事を述べた。これが生き神としての「ミソギ祝」で、上社大祝の元祖と言われる。普門寺ミシヤグジ平が屋敷であつたと言われる。

「有員」に関する古文書

- 一、用明天皇（五八〇）時代、前田家本、神氏系図序文
- 一、千野家本、神家系図序文
- 一、平城天皇（八〇六）時代、上社社例記
- 一、桓武天皇（七八一）皇子大祝職位次第書
- 一、神長守矢氏系譜

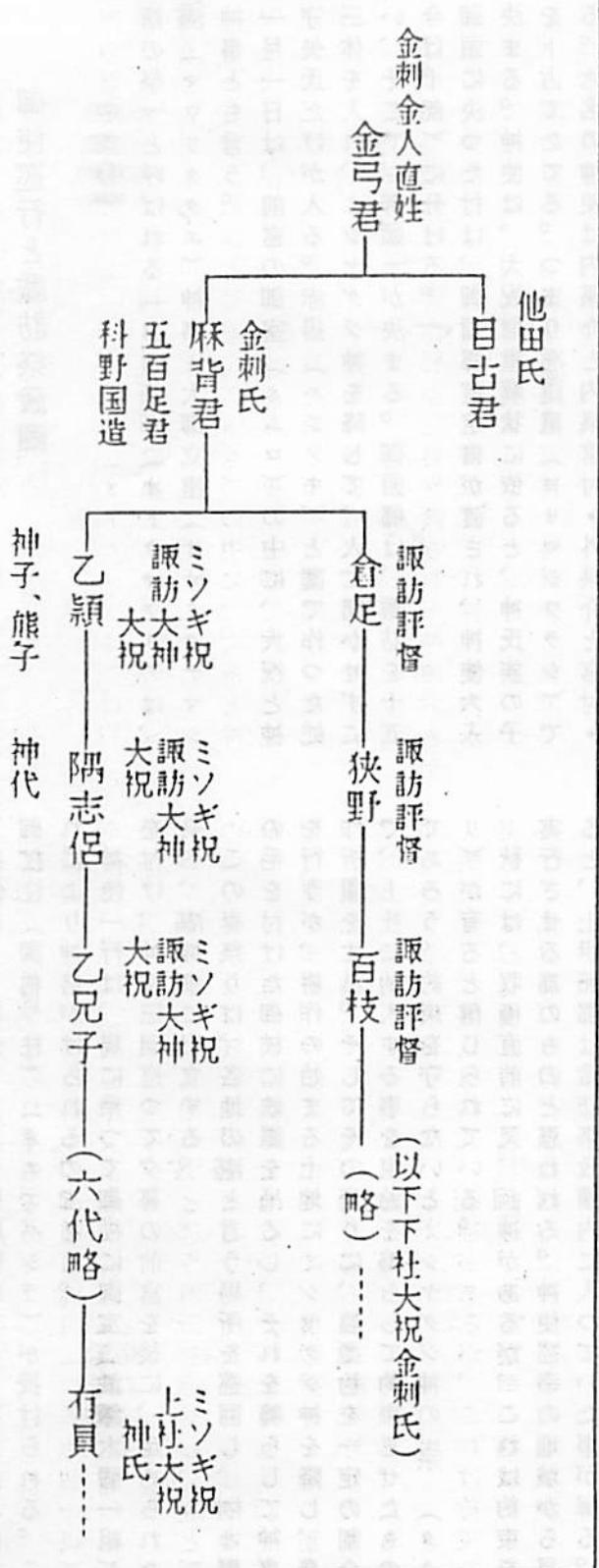
神長守矢系譜には、桓武天皇第五皇子、仁和二年（八六）に八十六歳で御射山大四御庵で頓死、とやゝ詳しく述べられ、その経歴が書かれ、「有員」の墓と言う配石が上社御射山

山社にある。大体奈良時代未頃の人物である。

阿蘇氏系図、九州阿蘇神社伝に、諏訪関係系図が載つ
ている。

この系図と大槻本神氏系図を考え合せて見ると、次の系図となる。

大祝本・神氏系図（神長守矢系図・阿蘇氏系図）



金弓君は、金刺氏で、子の目古君は他田氏となり、
麻背君は金刺氏、以下の子孫は下社大祝金刺氏となる。
一方、乙穎はミソギ祝となり、以下九代は、ミソギ祝
を名乗っている。有員になつて、上社大祝神氏となる。
注目すべきは、麻背君の子倉足で郡司（俗王）下社大祝
となり、乙穎はミソギ祝で、諏訪大神大祝（聖王）上社
大祝である。

御使巡行と諏訪祭政圏

「酉の祭」と呼ばれる「お頭祭」（オトウマツリ）は、
回湛（マワリタタエ）神事・大御立座（オオミタテマシ）

神事とも言う。

一月一日は、前宮の御室（ミムロ）の中に、大祝と神長守矢氏だけが入る。赤揚（ハンノキ）と藁で作つた蛇体三体を入れ、ミシャグジ神を降して、人に聞かせずに占い、そこで「御頭」が決まる。御頭郷は、諏訪を十五（今は十部）に分ける。

御頭に決つた村は、御頭郷差定書が渡され、神使六人が決まる。神使は、大祝信重解状に依ると、神氏族の子供をト占でたてる。つまり准座童（ヨリマシワラシ）である。六名の神使は内県介と内県宮付・外県介と宮付・大県介と大県宮付の三組になる。

「御頭祭」は、春秋の祭で、三月初午の日に外県御立座神事を行ない御使立する。続いて酉の日に内県と小県に御立座神事のあと出立する。

神使の出立の儀式は、上社で最大、かつ神秘的に満ちて行われる。



大御立座神事の神使巡行はこんな姿だったであろうか（小野神社）



上社の鉄鐘（てっくわ）

神使は、大祝から玉葛を頭に懸けられ、神長からは、御杖柱（御勢柱）（オニエバシラ）が授けられる。これにより神格がけられるのである。

神使一行は、馬に乗つて御杖に御宝（鉄鐸六個一組）を付け、神域三回巡つて夕暮の前宮を後に、定められた県へ、湛神事に出立する。

この春祭りは、各地の湛と言う場所を巡回し、榦と髪の毛を付けた御杖に鉄鐸を吊るし、それを鳴らして神事を行うが、耕作の始まる土地にミシャグジ神を降し、豊作祈願をする。そしてその変りに、農産物を一定の割合で、上社に納入する事を宝鈴を鳴らして約束させたものであろう。約束を守らないとミシャグジ神の祟（タタリ）があると信じられている。

秋には、収穫直前に又、回神があるが、これは約束を実行させる為のものと思われる。神使巡幸の地域から見ると、上伊那郡は諏訪祭政圏内に入つていた事が解る。

諏訪神社の祭禮

三月十二日、御左口神上げの神事で祭が終る。

酉の祭（三月酉の日）

前宮 一月一日、

蛙狩神事

御符受けをする。御頭の郷村が決る。

一月二十三日、御頭屋が出来る。

御亭主番（世話役）はここで起居する
御左口神（ミシヤグジ）を迎える。
二間四方の堀立茅葺の御神屋が作く
らる。

始まつたと伝えられる。
鎌倉時代には、信濃一国の地頭が奉仕した。室町戦国
の世も続けられ、近世には高島藩領、明治以後は諏訪地
方を挙げて奉仕している。

一月二十六日～八日まで、三日精進
一月二十八日、前宮で野位出しの神事、の後郷食

上社 前年 御小屋山（御柱山）で山作衆により「見立て」行う

一月二十九日、御左口神降しが行われる

一月十五日、神前でくじ引きをして曳行する御柱
と人足村とを定める。村では綱打をし柱

二月一日、御執貢 挂の神事
鹿肉を二十五本の木串に刺し、御頭
屋に掛ける

と人足村とを定める。村では綱打をし柱
して御小屋明神で「伐採式」をする。そ
して御小屋明神で「火入式」をする。

二月九日、御精進始めの神事

山作り衆は、用具を淨め「火入式」
して御小屋明神で「伐採式」をする。
山出し、御小屋山から競争で曳行して

三月一日、御執貢 おろし

綱置場に揃える。

三月七日、三日精進に入る
三月酉日、酉の日から「御頭祭」又の呼名「酉
の祭」になる

若者達が御柱に乗りたまゝ坂落しをする。この時
引宮の川越をして安国寺の御柱屋敷で引
き始め、坂を木落しする。この時
引川の川越をして安国寺の御柱屋敷で引
きの日まで

人衆がいる
同座で会食する
始める山海の珍味・大量の酒で神

御柱祭「御造営」

上社

申・寅年五月に、上社四本、前宮四本立てる

七年に一度、申・寅年に行われる。桓武天皇の時代に

四月 翌日
引宮の若者達が御柱に乗りたまゝ坂落しをする。この時
引川の川越をして安国寺の御柱屋敷で引
き始め、坂を木落しする。この時
引川の川越をして安国寺の御柱屋敷で引
きの日まで

五月

ここに置く。
「里引き」御柱を迎える舟と行列が、

本宮一の御柱の所まで行つて引返す。
その後、「里引き」となり御柱を引く。
事に削り落とす。ついで境内の所定の位位置に着くと、御柱の先端を立てて角行錐一

下社

下社の御柱も上社と同様であるが、東俣国有林で伐採される。秋宮四本、春宮四本が立てられる。

上社・下社とも、御柱を引く時は、木遣り唄が歌われその美声が郷音きわまる。木遣り唄の筋廻しは、上社と下社では多少違う。

里引きには、村々から長持が出て、長持唄が歌われる。又、御騎馬（騎馬行列）が通り、屋台も出て他郷の者や諏訪出身者や、新類縁者の客呼びや近年観光客等も多く大層な賑いである。

秋になると、諏訪の各部落では、村の御柱祭をする。これは子供達が引き、大人が援助をする。これは小宮の御柱といい、大宮（諏訪神社）に準じて行われる。諏訪地方では、御柱年には普請をしない、結婚をしない等の習慣は、元は神に対する忌であつたが、近代化された今日も尚、その習慣は残つてゐる。

御作田祭り（お舟祭り）

下社春宮 六月晦日、御作田祭、御作田社でお田植
下社秋宮 七日朝日、還座祭（お舟祭り）八百人が裸で奉仕するので、裸祭りとも呼ぶ。

六月晦日、御作田祭、御作田社で田植えが行なわれる。

七月朔日、還座祭、春宮から秋宮に渡る「お舟」柴舟が有名なので「お舟祭り」とも言う。御頭郷の人足八百人が裸で春宮より秋宮まで担いで行く。今はソリを付けて曳行する。昔は襷一つで裸で奉仕したので「裸祭り」とも呼ばれて、威勢の良い祭りである。

秋おり前に、神靈還座の行列が有り、秋宮に到着すると直ぐに、鎮座祭を行う。

組め慶事録上社は、長を倉割當て奉仕させたが、その後衰微し十十九年（一六一四）新しく御頭帳を一定の大郷故に二組扱とし、十五年に一巡す。

諏訪の「酉の祭」、下社の「御作田祭」に古社が勤め、新田は之に属すもの

ミサ山祭・上社

諏訪神社の分社は、全国に壱万社もあると言われている位い、広い信仰を持たれている。諏訪社の祭日は、多くは八月二十七・八日である。

本社の祭りは、年間に七十五度とも言われ、祭日の多さも特異である。その内、上社・下社の祭日で、同じ日に同じ神を祭るのは八月のミサ山祭である。

上社のミサ山神社は、八ヶ岳山麓原村にあり、神野と呼ばれている。ミサ山祭の記録は、上社関係は、諏訪大明神画詞等に、良く伝えられており、下社関係も同様の祭りとみられる。

八月二十六日、大祝以下神官・社僧・頭人・氏子等は前宮十三ヶ所の神を祭り、鉢に十三社の神（地元神）の名を書いて吊るし、酒室神社で供膳し、長峰道で狩をしつつ登る。

ミサ山の鳥居に着くと、一騎づつ大声を挙て通過するが、これは神々に対する作法である。

御狩神事の前に、大祝以下参加者の宿泊用仮小屋が造られる。これは定められた郷の役目で、薄の穂で葺いた穂屋が建てられ、大祝の籠の大四御庵（オオヨツミイホ）を始め御簾籠（オニエコモリ）等、幾つも作る。こ

これから、ミサ山祭の事を穂屋祭とも言うのである。

普段は、静かな八ヶ岳の裾野が、この夜から大祭場となる。記録に依ると、山神に狩猟安産と豊作祈願の儀式共、幣帛に薄の穂（尾花）を捧げ、祝詞を読み、のち郷饗膳儀式をする。郷饗膳は毎日あるが、獲物や山海の珍味を、神と人とが一緒に食事をして、共に嬉ぶ意味で、神人相嘗（シンジンアイナメ）である。御狩も毎回行うが賞式で、大祝から尖矢に尾花を添えた賞が出る。又武道競技も行われるが、鎌倉室町時代には、小笠懸、相撲・草鹿・武射・競馬等があつた。

両ミサ山社祭には、三歳の子供が参拝し、饅の放流をするが、放生会の意味である。

ミサ山祭順序（毎年八月）

二十六日、登御神事（ノボリマシシンジ）

二十七日、山宮參幣・郷饗膳・競馬・揚馬・御狩

二十八日、山宮參幣・御狩・郷饗膳・競技

二十九日、山宮參幣・御狩・郷饗膳・矢抜・競技

三十日、下座神事

ミサ山祭・下社

ミサ山祭は、信濃一円の奉仕で行われた。大祝はその主役であつた。下社大祝金刺盛澄は、寿永二年（一一八三）夏、木曾義仲軍の主軸として京を目指し、越中の国に居たが、大祝として欠く事の出来ないミサ山祭が近付いた為帰国している。

又嘉永の頃、信濃の御家人小坂孫三郎盛直が罪で硫黄島に流されていたが、ミサ山祭の酒室の頭人であると言ふ事で、先例により、その罪を許されて帰国した記録もある。

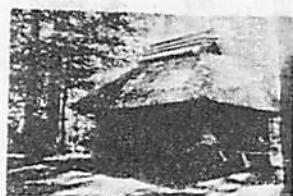
祭りの様子は、慈雲寺の僧一寧一山が斎修禊として、砥川とか承知川（精進川）において、精進潔斎して白衣を着て賑やかにミサ山祭に登るのが、鎌倉時代の風景であつた。

子も参集し、そこえ白拍子、巫子、田楽、呪師（ノロンジ）、猿樂等の芸人が流れ込み、花代を貰つて芸を見せた。

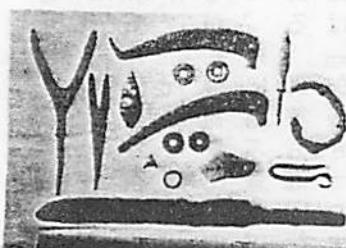
夜になると「神樂鉦鼓の音、巫子が託宣相続いてかまびすし」とある様に、旅芸人、口寄、遊女等の楽器や呪（マジナイ）の言葉、嬌声等で賑やかで、霧ヶ峰高原は大キャンプ場と化した。

下社の、ミサ山祭りの幣印は、青薄、メギの皮、桧皮栗の皮、白紙で青黄赤黑白五色の幣である。諏訪神社の狩りで禁止している山鳥の色と同じで、山鳥は山神の形として信仰され、これと関係あるものと思われる。

雪
ち
る
や
穂
屋
の
す
す
刈
残
し
芭
蕉



上社ミサ山、大四御庵
(おおよつみいも)の古い
穂屋



下社ミサ山社周辺の出土品

下社のミサ山社は、霧ヶ峰高原の北方にある、八島湿原と言われる高層湿原地帯の南端にあり、西に開いた盆地状の中央に社がある。

祭神は、虚空藏菩薩で周囲三方の斜面は、階段状に造成されて、そこに參籠め穂屋が造られた。

出土品は、灰釉陶器、須恵器、青磁、常滑信楽、中世雜陶、直刀、なぎ鎌鉄、矢尻、宗銭、明銭、それに大量のかわらけ等で、平安初期のものが殆んどである。祭祀には、地元の氏子、信濃各地を始め幕府・甲斐の氏

諏訪の七不思議

1. 御神渡（オンミワタリ） 十二月未～一月始頃

諏訪湖は、標高七百五十九米の湖で、冬には全面結氷し。氷が收縮、膨張して、いわゆる御神渡りが出来るのである。

會て諏訪湖が出来た遠い昔から、冬の湖は凍り、そして大音響をあげて、氷が割れて持上る不思議な現象から、その氷の割れ方の方向に依り、農耕の豊凶、天下の吉凶を占う様になり、幕府の奉行所に大祝から注進さらた。

湖南の上社のある地点から、下社のある方向に向くのが多く、伝承では、「上社の男神が下社の女神の元に通う路である」と言われている。

例年では、年末の夜に出来るのが普通であるが、承久三年（一二二一）一月三日の正午に神渡りが出来たので、異変の前触れと占つてある。そして五月に、承久の変の大乱が発生したので、總べて諏訪明神の神意とされ、大祝家では、幕府に応じて出陣している。

り決定されていた。諏訪の古代ト占で有名なものとしては、諏訪湖の「神渡り」と、簡粥神事が伝わっている。

上社簡粥神事は、上社と下社で行つていたが、上社は戦国時代に跡絶えた。もとは、前宮で行つていた様で、焚物に蛇の干したものを燃したとも伝えられている。不思議な神事である。

下社は、現在まで伝えられ、一月十四日夜半から十五日未明まで粥を煮て、早朝に占いを報じている。

簡粥殿は、春宮境内の小祠で、内部は縄文時代の石圍炉に以てある。釜には、小豆と米、それに年末の神事に用いた御幣の串の下方を（芦を筒に切る）揃え、簾状につづつ入れる。一晩一處に煮沸する。

番役には、宮司以下神官一同が当り、祝詞（ノリト）を唱え、シャモジで混ぜながら煮る。

芦束の数は、中世の記録では三十三本、江戸時代四十三本で、その数は五穀と作物の名前の数が定めてある。稻・大麦・小麦・大豆・小豆・雑穀・大根・菜などで、最後の一本は「世の中」の占い用となつていて、早朝炊き揚げて取り出すと、小豆粥は洋かん状に、筒の中に詰つてある。

神官は、三方の上に芦束を乗せて社前にて切り開き粥の入つてゐる状態で、作物の出来を占い、大声にて報ずるのである。

2. 簡粥神事（一月十五日）

古代の祭政体の政治運営と言うものは、總て占によ

神との古来からの関係を物語るものである。

江戸時代の菅江真澄の見学記に「簡粥の報告を聞き取らんと、早晚の暗き社前に、百姓達、群を成し、他人人のつばに頭を打ち、釘に袖を引掛けで破きつつ、短い筆で懷中紙に書きとめている」様が見事に記録されている。

当農民は、如何に神占いが農耕の頼りになつたかが窺う事の出来る神事である。

5. 御作田の早稲 六月三十日田植

下社、御作田神事は、六月三十日に田植祭りが行われる。その苗が八月一日の還座祭（お舟祭）には、穗を出すと言う神験のある早稲と言うもの。

3. 蛙狩神事（一月一日）

蛙狩の神事は、毎年元旦朝、上社の御手洗川の氷の下を堀つて、赤蛙を搜す神事で、画詞には五、六四はあるとある。今は二四を取つて来る。

赤蛙を三方の上に乗せ、社前にて弓矢にて射て刺し抜き大祝の前で神長が呪文を唱え、調理して五官祝以下に授与している。

この神事は、(1)祭神を蛇とする生贋説、(2)御狩始め説、(3)食料として神に供える等の諸説がある。

4. 高野の耳裂鹿（神野） 四月、酉の日

前宮の四月、酉の日の祭りに、七十五頭の鹿が高野から（神野）、狩猟されて供えられた、その中に必ず一頭、耳の裂けた鹿がいると言うもので、鹿と諏訪明

6. 宝殿の天滴（テンテキ）

上社、宝殿の茅葺屋根は、如何なる晴天の時でも、必ず水滴がたれていて、天滴が水舎に溜つてている。

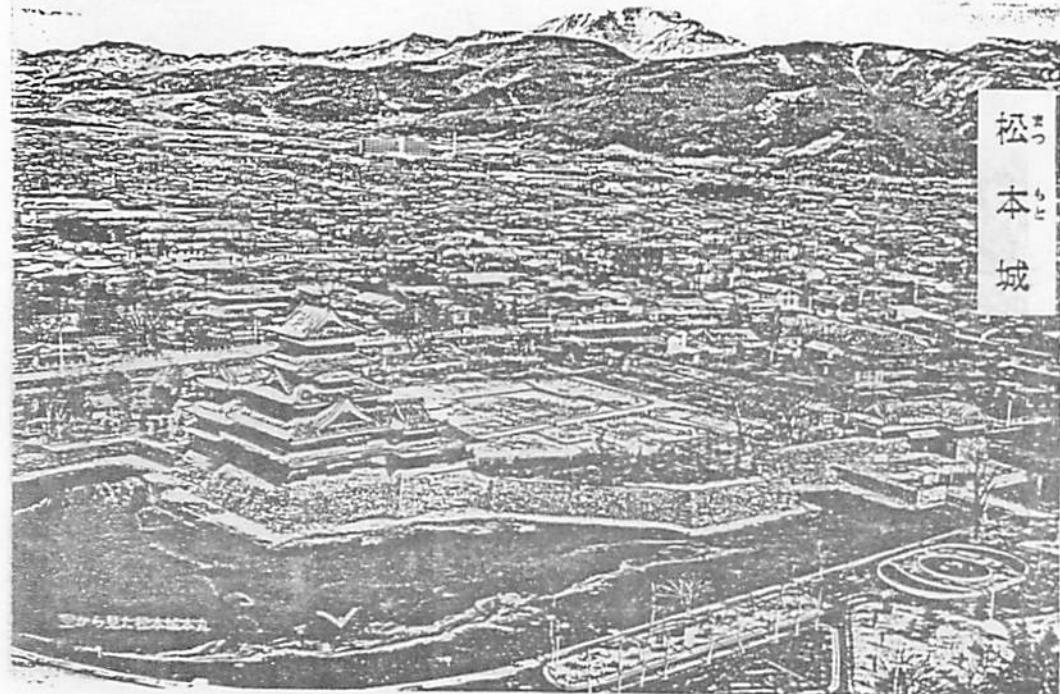
旱天の時には、この水を竹筒に入れて持ち帰り、祈願すると雨が降ると言い、甲州方面まで信者は多い。

7. 葛井の清地

十二月三十一日、上原の葛井神社の池に、諏訪神社の一年中の幣白印を沈める。

すると、翌元旦の朝、遠州（静岡）猿投池（サナルイケ）に浮かぶと言う不思議な池とされている。

松本城



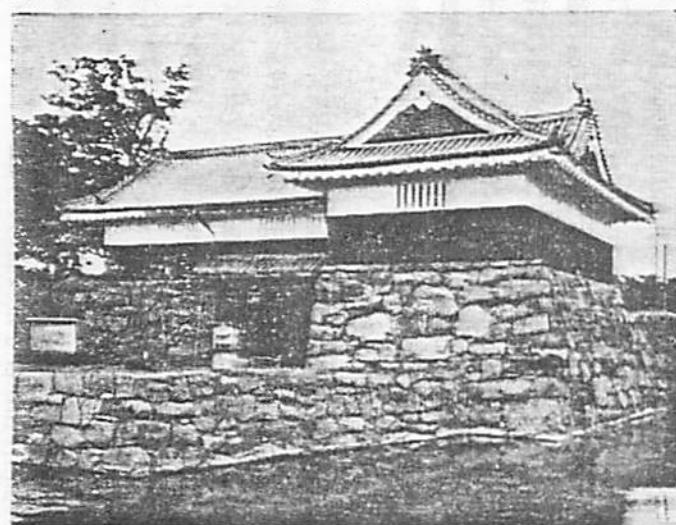
松本城

○鳥井　○松本市中谷公園　○平賀　○石川政正、
石川康長　○天正十八一年夏初年　○五瀬天守閣

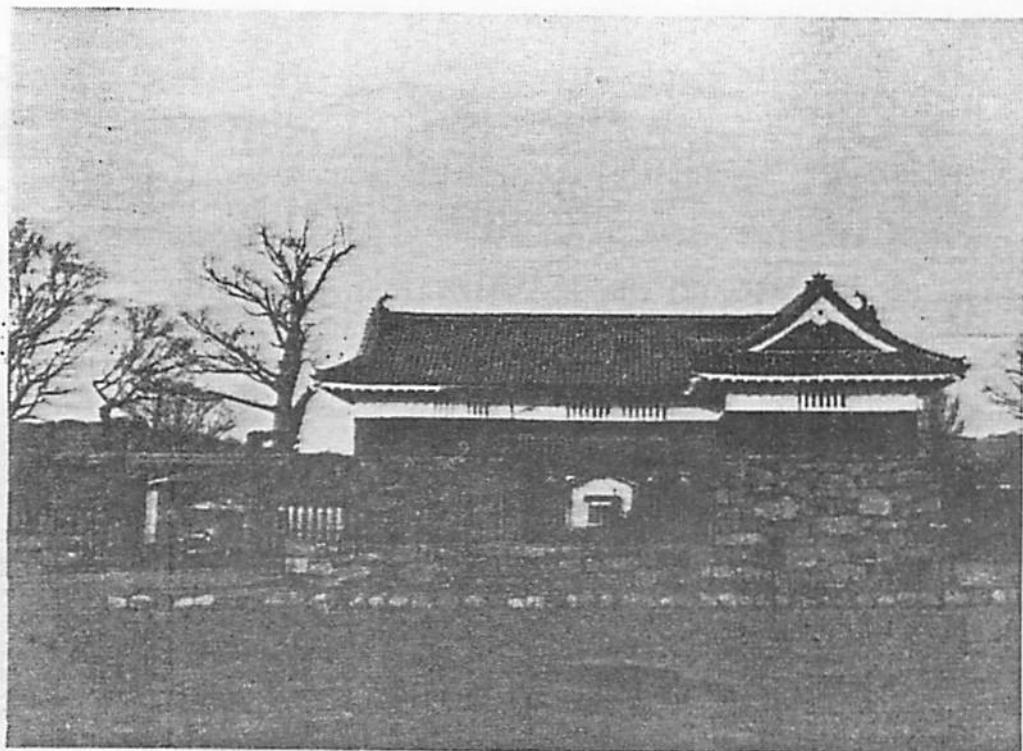
松本城は、江戸以前深志城といった。

深志城については、永正元年(1504)、貞朝の代にその支族島立右近大夫貞永が築いたものと伝えられてきた。しかし、『諏訪御符礼』という古書によると、深志には早くも享徳三年(1434)に坂西氏があり、林城落城の時には『二木家記』の伝えるところに、坂西氏がいたのである。

武田氏は三十余年間、信濃を領有したが、天正十年(1582)三月、織田信長の攻撃により勝頼が天日山に自刃するに至り、その統治は終わる。当時の深志



松本城 大手門(黒門)



松本城大手門

城々代は馬場信春であったが、開城して逃げ去ったと伝えている。

この戦後の論功行賞に、信長は信州攻撃を先導した木曾福島城主の木曾義昌に深志城と安筑二郡を与えた。

しかるに同年六月一日の本能寺の変で信長が倒れ、信濃一帯が再び混乱状態になつていき、いちばんやく松本平に進出したのは上杉景勝であった。前記した小笠原長時の弟貞慶を擁して深志城を占領した。ところがこれに不満をもつた長時の旧臣たちは、三河の岡崎にいた長時の子貞慶を迎えて深志を占領した。同年七月十七日のことであつた。

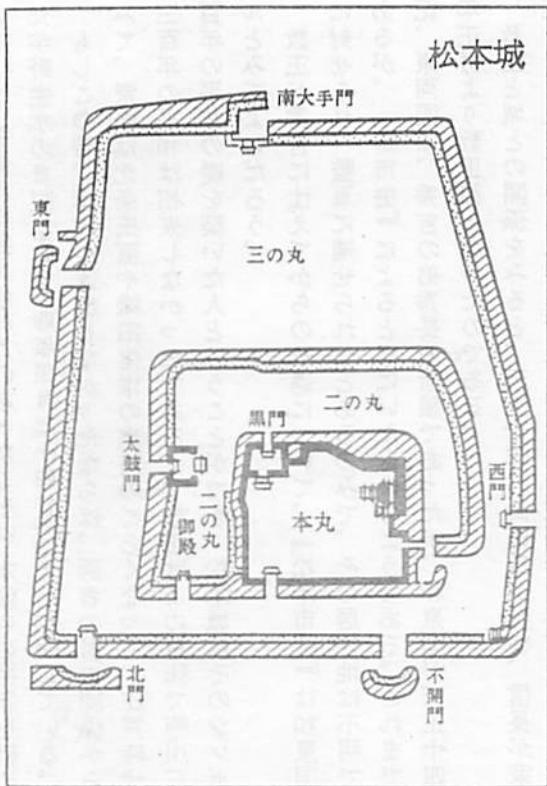
天正十年代の深志城は、あたかも走馬灯のように城主が変わつたが、最後に小笠原貞慶が父祖の地を回復したもので、これは父長時・の林城落城より三十三年目であった。このときより貞慶は深志城を松本城と改めたと伝えている。これより貞慶は領内の平定に当たつたが、対外的には南に徳川、北に上杉、東に北条、西に豊臣と強豪の間に挟まれていたので、最初は上杉氏に、つぎに徳川氏、さらに豊臣氏にと遊泳して領土の保全を図った。最後には再び家康付となつた。かくて貞慶は天正十八年の小田原城攻めに参加し、戦後は下総の古河に移つた。

『信府統記』(享保九年一一七二四年著)によると、貞慶は松本在城中に現在の松本市の基盤となつた城(天守を除く)と城下町をつくつてゐるが、今日の城郭史によると、近世城郭は封建大名によるものとされてゐるから、貞慶時代の城と城下町は今日のものとは異質なものであった。そして城の周辺には武士や町人が雜居していたものであろう。

天正十九年の小田原戦後、秀吉と家康との所領交換により、同年

八月、秀吉の部将として和泉国より松本へ入部したのが石川伯耆守数正であった。数正の家系は徳川氏累代の譜代で、中でも数正の祖父安芸守清兼(初名忠成)は、清康、広忠より家康の幼少まで徳川家の苦難時代を守った人である。清兼と夫人水野氏(法名妙西尼、家康の母の異母姉)の間には、嫡子日向守家城(一五三四一一六〇九)があり、その後は伊勢亀山、常陸下館の両藩主に分かれ、明治維新に至った。

『信府統記』を採用した松本城関係の記録は数正をこの家成の兄としているが、実は清兼には嫡子の家成の他に二人(三人ともいいう)の庶子があり、長子の右近大夫(右近將監とも)康正は数正の父であ



る。

戦国時代の俳人宗牧の『東国紀行』を見ると、康正は広忠時代岡崎奉行をしている。またその妻は能見松平家の重利の女で、康正早世後は松平周防守康親に嫁している(中村孝也氏著『家康の族葉』他)。

このように康正を逸したのは、康正が早世し業績が少ないためと考えられるが、このことは数正についての研究にも支障をきたしていることと考えるので付記しておきたい。数正の生年は不詳であるが、その末裔と伝えられる埼玉県人の石川新太郎家の位牌によると、享年六十歳と記載されている。もしこれを信ずるとすれば、数正是天文二年(一五三三)に生まれたことになり、家康より九歳、叔父家成より一歳年長であり、松本へ入部した時は五十八歳であったことになる。

数正は家康の家臣団のなかでも、武においても一頭他を抜いていたが、外交折衝の面にても朴訥な三河武士のなかでは珍しい存在であった。またその純忠は死を覚悟して駿府に赴き、家康夫人と世子竹千代を連れ帰った一事でもうかがえる。しかし岡崎城代中の天正十三年、小牧戦の終戦処理に端を発し岡崎を出奔して大坂に赴き、秀吉に仕えたため、江戸幕府時代より最近に至るまで逆臣扱いにされてきたのである。ために数正の築城した松本城についても陰影を蒙っている面があった。

しかし数正が秀吉側に従った以後の歴史の歩みを調べてみると、秀吉はその妹朝日姫を家康に嫁せしめ、大切な母を人質として岡崎に送るなどの策をとり、極力徳川側に満足感を与え講和を達成して

いる。この裏面には数正の尽力のあったことは、本願寺の祐筆を勤めた宇野主水の日記(天正十四年正月二十四日付)でも判明している。

もしこの時、講和が達成しなかつたならば、両者の勢力関係からみて、家康は北条氏直や織田信雄の末路のことくなつて、江戸時代三百年の平和は招来しなかつたであろう。数正はこの意味で徳川三百年の平和の礎を築いた人ということができ、松本城はそのシンボルとみてよいだらう。

数正が秀吉に仕えてからの遭遇について、『松本市史』は和泉国に封ぜられ、監軍に補せられたとあるのみで、その居住地は不明であるが、『堺市史』によると堺にいたものとある。これまで紀、泉州国は、秀吉の弟秀長の所領であったが、和泉国が天正十四年正月より数正領となつたのである。

数正と城との関係をみると、天正十年、武田氏が滅び、信長が家康を安土城に招待した時、数正是酒井忠次らとともに随伴し、安土城の天守等を見学している。また秀吉に仕えた頃は、ちょうど大坂城とその城下町が完成した時期であり、堺とは日と鼻の距離にあつたから、近世式城郭については十分知識をもつて松本へ入部したとのと考えられる。

松本築城がいつ着手されたかは文献にはないが、入部の年にその手始めとして「地祭」を執り行なつたことが文書に残っている(富尻市大宮八幡文書)。数正と同時に信濃入りした飯田の毛利河内守秀頼、諏訪の日根野鐵部正高吉、小諸の仙石権兵衛秀久の各部将が、入部早々ただちに築城計画をしている事実に照らしてみて、松本城も数正入部後早々の着工であったとみてよい。

一方、数正は氣宇壮大にして陽性の人であったようで、(『三河物語』)、十万石(または八万石とも)という中級の大名でありながら、井伊氏が十八万石所領の時つくった彦根城よりはるかに大きな規模の築城計画を行なつた。

もちろんこれには、秀吉の支援によるものであったであろうが、波乱万丈の過去をもつ数正としては、五十八歳という人生の晩年にあたり、その抱負経営を示すための経験を加えて雄大な構想のもとに着手したものであろう。しかし、数正是入部の翌々年の文禄元年(一五九二)末に死亡した。

ために松本城は数正の長子玄蕃頭康長(三九郎、三長、光長)の代になつて完成したもので、その時期は慶長(一五六六—一六一四)初年と推定されている。

康長は粗暴の城主で、諸寺院を壊し、築城資材にしたと『信府統記』は伝えているが、先般の解体復元に当たっては、これを証するものはなかつた。

康長は仏道に入り常住坐臥正しく余生を過ごしたようで、その評判はよかつた。康長の女は大久保長安の総領新十郎に嫁していため、長安死後の事件で改易されたのであるが、長安の一族がことごとく極刑に処せられているなかで、改易だけですんでいるのは重大

な罪科がなかつたという証拠である。ちなみに佐伯にある康長の位牌には遺骨の一部が納められており、また朝夕礼拝した念持仏も残っている。これらは復元成った松本城に招致して慰靈すれば、さぞかし康長も浮かばれることであろう。

周知のように国宝天守のうち最古のものは犬山城であって、つぎが松本城であるとされている。しかし、最近犬山城の解体復元工事が、犬山城が近世式天守をもつようになつたのは慶長五年の関ヶ原の結戦後であることが判明し、したがつて松本城天守が国宝天守のうちでは最も古いものであることになった。

江戸時代の松本城主は石川氏、小笠原氏(八万石)、戸田氏(七万石)、松平氏(七万石)、堀口氏(十万石)、水野氏(七万石)、戸田氏(六万石)と続き維新に至つてゐる。

(中鶴次太郎)

長朝につづいて貞朝、長棟、長時と四代約六十年間林城にいたが、長時のとき隣国甲斐の武田信玄は次第に信濃を蚕食し、天文十四年(一五四五)には松本平に進出、同十七年、林城の南方八キロの村井に城を構え、林城攻略の拠点となし、同十九年七月ついに林城を陥落させた。

林城をめぐる衛星的館城については、信玄の家臣高白斎がものした日記と、長時の遺臣二木寿最が後年記した家記により知ることができる。まず『高白斎記』には、「七月十五日戌刻大城(林城のこと)深志、岡田、桐原、山家(今の山辺)五ヶ所ノ城自落、島立、浅間降参、仁科道外出仕(中略)十九日深志ノ城酉ノ刻高白鍬立、同戌刻鍬五具、屋形様(信玄のこと)深志へ御出、二十三日惣普請」とあり、つぎに『二木家記』には、「長時公林の城に御引籠りなされ候とき、長時公を背き晴信公の方へなる衆、山家、洗馬の三村入道、深志の坂西、島立殿、西牧(中略)御味方の大身衆は、大甘殿、平瀬殿、刈屋原、麻績その他(下略)」とある。

これによると林城をめぐる衛星城郭には、長時の縁故者が多く、遠距離の洗馬(東筑摩郡朝日村)、西牧(南安曇郡梓川村)、仁科(大町市大町)などは土豪出身の家臣がいたようである。このうち仁科氏は古くから大町方面にあって、小笠原氏とは別個に存在した家柄であるが、このころは小笠原氏に従属していたもので、長時夫人は前記した仁科道外の姉(妹)である。

林

城

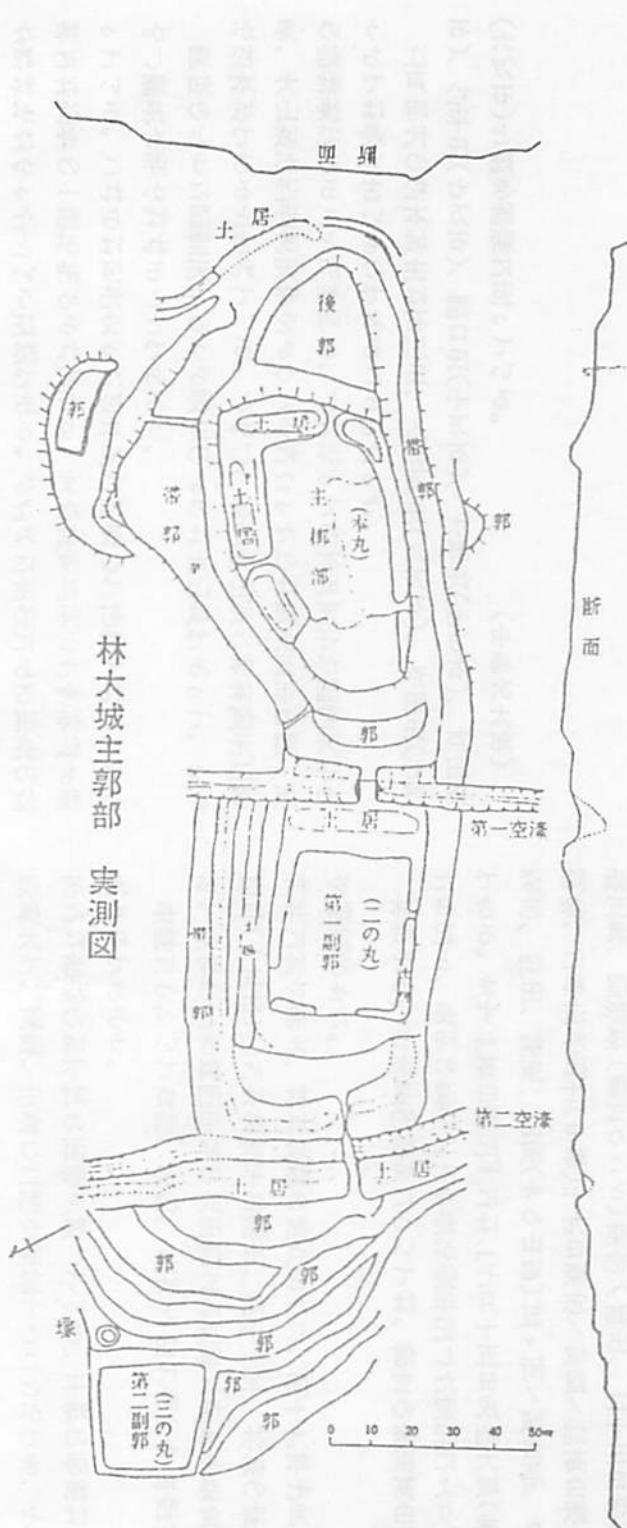
林
城
松本市林

小笠原氏はここに八代約百五十年在住したが、戦国の時代となって防御的要害の必要を感じ、長朝の代に井川の東方四キロの林(松本市東郊)に広範な山城を築いて移つた。これを林城(別名金華山城)といい、今も城址を残している。この地は俗に東城山と称し、

林城陥落後、長時は北信の村上氏に援を乞うたこともあるたが、天文二十一年、最後の拠点中塔城(南安曇郡梓川村)が落ちるに及び京都に逃避するにいたつた。この間松本平に散在していた城は、すべて武田軍のため陥落または開城するにいたり、小笠原遺臣の多くは武田氏に仕えたのである。

武田氏は林城陥城のとき同城を破却し、深志城を普請し、ここに馬場信房を城代として駐屯させた。これは深志が松本平の中枢地であり、行政、交通上の要地であったからである(なおこの深志城は今日の松本城の前身である)。

小笠原氏代々の本城



林大城主郭部実測

小笠原家について

貞宗 — 長政 — 長基 — 長秀と続くが。

家系

小笠原氏は、源義家の弟新羅三郎義光三世ノ孫、加賀美二郎の二男小次郎長清が甲斐国小笠原を本拠として住み付いた事より始まる。

義光の孫逸見冠者清光の三男、二郎遠光は、甲斐国加賀美庄に住んで、始めて加賀美を称したが、その嫡男の光朝は秋山を称し、次男の小次郎長清が父遠光の姓を継ぎ、加賀美小次郎長清と称した。長清は甲州小笠原庄で和田義盛の女を母として生れたとしている。「吾妻鏡」では、長清を加賀美次郎とも、又小笠原次郎とも書いてあるので、この頃小笠原氏を称したのであろう。長清は小笠原の始祖であり、加賀美氏は、長清の弟光清経光が継いでいる。

長清の系図は、後記参照のこと。

南北朝期、建武五年（一三三八）八月に、諏訪氏は、北条高時の子時行を奉じて、伊那の高遠城に挙兵したので、小笠原氏は足利尊氏の為に、戦っている。

室町時代、南北朝期の最後の守護は、小笠原貞宗である。貞宗は、弓馬礼法の道に優れ、又北山第一の笠懸で後醍醐天皇の前で、射手を勤めた時、十射中で十中の好成績を挙げ、弓馬の家柄として、後世に伝える基を作った。

大内義弘の応永の乱は、同十二月、義弘の敗死により終つたが、長秀は半年程京都に滞在して、応永七年七月未に入信した。

大塔合戦の下地には、小笠原家は終始北朝方で、尊氏に従い信濃の守護に補任されている。これに反し、諏訪の神氏始め滋野・村上・島津・仁科・三村氏等、信濃国人達は、南朝方として戦つてゐる関係上、南北朝合一となつても、小笠原家の入信に対しては、基本的に反発反

利家に仕え、足利三代将軍義満と長秀との関係は親密であつた様である。長秀は京都にあつて、父長基より家伝の礼法指南並びに、弓馬の礼指南の家柄を相続している

感が有る所に。

同七年七月二十一日、佐久郡大井庄の大井光短の所に

長秀が到着し、（大井氏は小笠原と一族）信濃国の支配に付いて相談した。そして国内の総ての国人に対し、使者を送り信濃守護職補任の就任を伝達させた。

国人の内、源氏の流れを汲む者は、一応承つたが、（承知）大文字一揆の面々は、「故敵当敵」として、之を受けず、別の守護の補任を幕府に要請仕様と内談、情勢は不穏となつた。前年の島津国忠の反乱と一連の事態である。

守護長秀反対の勢力蟠拋する中を、長秀は、善光寺の守護所に入つた。守護職の職務に當る事となる。

長秀は、華麗盛大な、目を奪うばかりの武具・道具を立て並べ、長秀好みの童子を連れての大行列を、一族一門二百余騎と共に、群衆の見物する中を善光寺に到着した。

出迎えた大文字一揆等の国人等が長秀に對面すると、「長秀会釈の様、不結紐不帶扇、增而不及一献沙汰」という次第で、「偏に公家之上臈・稚兒・傾城之振舞也」と言う。その不尊の振舞に、国人一同憤慨して、近くの水内郡窪寺に集合して事態を相談した。一応穩健にと評議一決、馬・太刀等を献じた。

然し、長秀は、国人等の既得権を認めない方向に出た為に、村上義満等は、国一揆と称して、佐久の伴野・平賀・田口等や、大文字一揆等が内密に触れを廻して、守護使を追返したり、殺害して、長秀に対する反抗の姿勢を示した。一戦の陣取りも打合せて、九月三日、それぞれ川中島に陣した。

大塔合戦

村上満信は、千田・飯沼等と共に五百余騎にて、篠ノ井岡に陣し、佐久勢は、佐久三家を中心軸に七百余騎で上島に陣を敷き、小県の海野幸義は、安曇の中村弥平四郎・会田岩下・大芦・飛賀留（光）・田沢・塔ノ原等三百余騎にて山王堂に展開、高梨・高井勢は五百余騎にて二柳に陣し、島津等高井・水内の混成軍五百余騎は、千曲川端に陣した。又安曇の仁科等の大文字一揆や西牧・水内の諸勢は、芳田崎石川に陣取り、諏訪神家の大文字一揆、筑摩の面々・朝日の三村等反守護勢力四千騎が参戦した。

小笠原長秀軍総勢八百余騎にて、九月二十三日、犀川の横田に陣取り、塙崎山城に籠城戦と決し、移動を始めた時、合戦が始まる。長秀軍敗れる。

長秀は、敗戦の中、辛くも塙崎山城に逃れ、残党三百騎ばかり、大塔の古城に籠るが、兵糧は無く飢と寒さに十月十七日夜に至り、最後の一戦と討つて出て、長秀方の名有る武士の多くは、討死して十八日早朝に、戦は終つた。

勝に乘じた一揆勢は、長秀側の拠す塙崎山城をも、一気に攻め落そうと押寄せたが、小笠原一族の大井光短が村上満信と談合して、和議諒承したので囲を解いて引上げた。

この戦で、筑摩の土豪は大方一揆に加担して戦つてい

るが、一部は長秀側で戦い、井深勘解由等、大塔城にて討死している。

長秀は、京都に退いて守護職解任されている。この時の居館は、松本の渚城である。

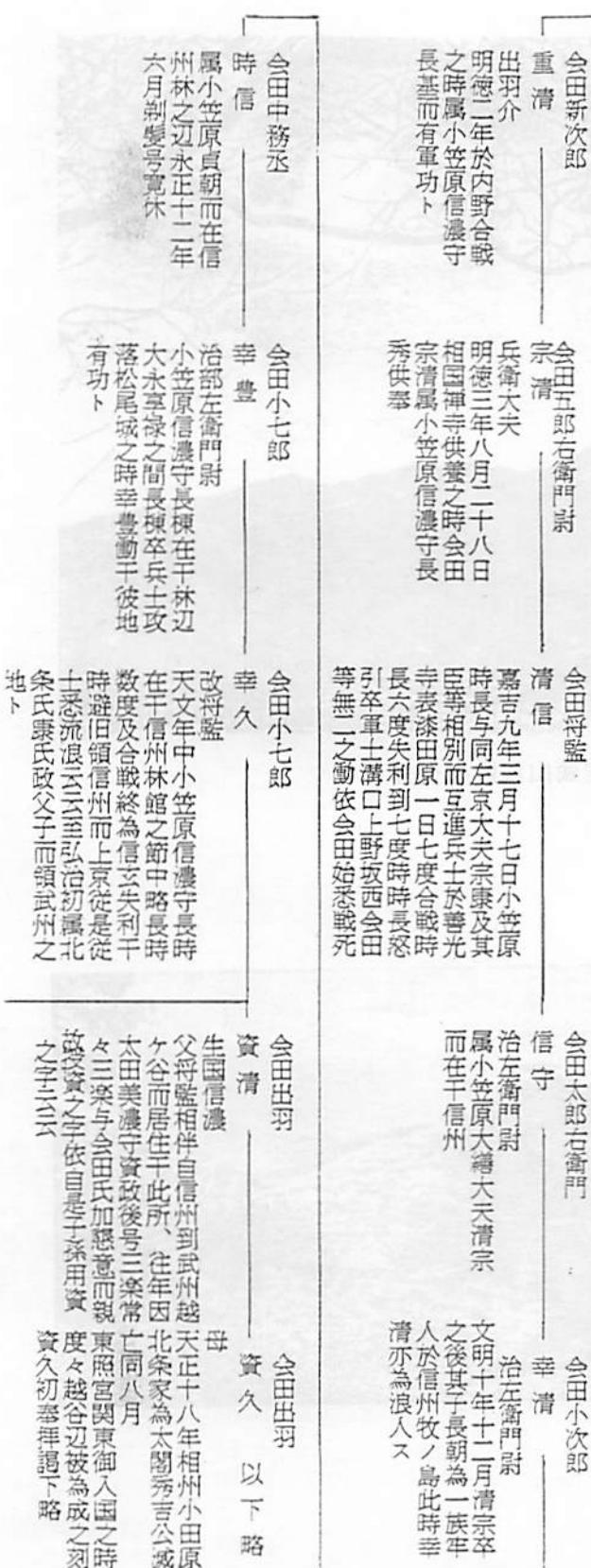
◎この戦に、反守護側に「岩下会田氏」の名が見える。

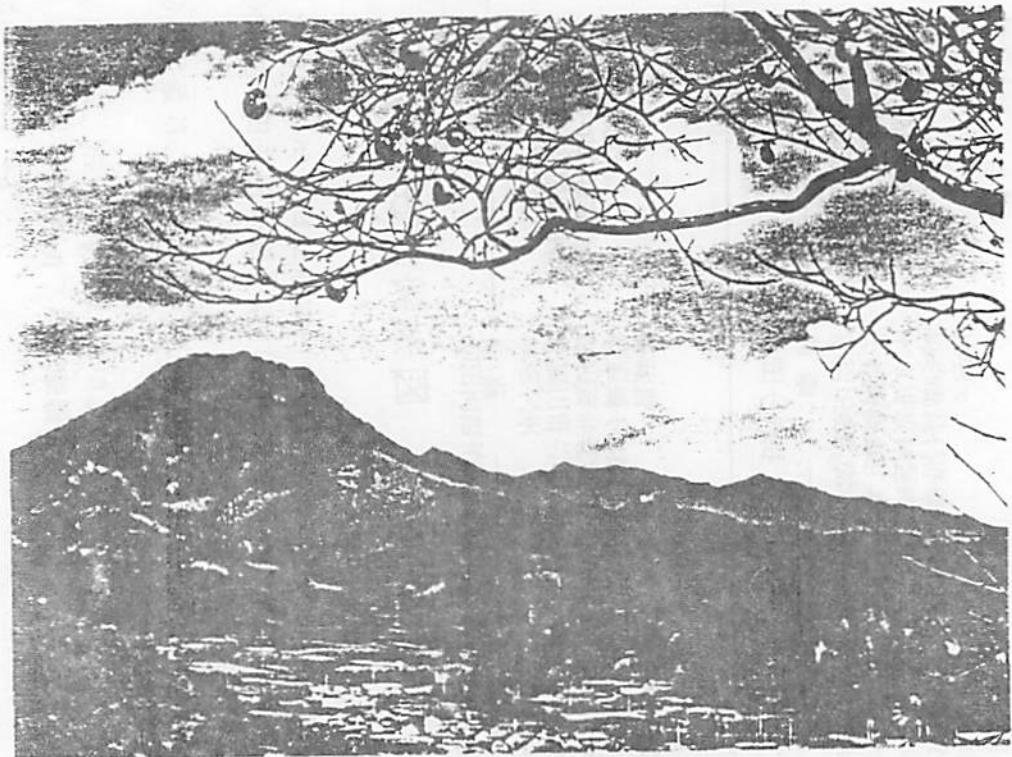
◎越谷会田出羽系図中に、(会田郷前居住者「海野会田」と思われる)重清明徳二年京都内野合戦に小笠原長基

に属し軍功有と、又その子宗清は、明徳三年小笠原長秀に従、相国寺供養の時供奉と有り、「海野会田」は終始守護側である。

◎明徳二年(一三九一)八月二十六日、京都において明徳の乱起り、長基出陣し足利義満に尽力、京都内野合戦に軍功有、今まで召上げられていた所領を、子息長秀に還付安堵される。

会田出羽家系図





会田虚空藏山城跡の全景



刈谷原鷹巣根城址

会田郷 長野県東筑摩郡四賀村

四賀村とは、明治二十一年四月、市町村制の公布により、翌二十二年四月、錦部・会田・中川・五常の四ヶ村が合併し、四ヶ村併在の村制は、昭和二十二年廃された昭和三十年四月、新四賀村が発足、今日に到る。

先史時代

四賀村の生い立ちについては、説明が繁雑であるのでその道の専門に、おまかせして、化石の出土で、御想像願いたい。

四賀村穴沢地区より、鯨の化石が発見され、県の天然記念物として保存されている。他にシナノトドの牙の付いた頭骨化石も発見され、その他魚類・貝類等、この地方がかつて海であつた証故が沢山出土している。

鉱物・鉱産物類の出土は、方鉛鉱・石英・水晶・瑪瑙・方解石・玄能石・緑れん石・ソーダ沸石・亜炭・天然ガス等を産する。

哺乳動物は、クマ・シカ・たぬき・きつね・いたち・てん・あなぐま・いのしし・野うさぎ・りす・むさび・野ねずみ・家ねずみ・もぐら等の生體が認められる。

四賀村の先史時代の遺跡は、東筑摩地方の中では少い方である。縄文前期の住居址は一軒も発掘されていないが、中期・後期のものは、それ等の遺績から石鏃・石斧等の発見を見、又加曾利E式小ツボや打製石斧や黒耀石片等の発見を見る事が出来るので、同時代の居住者のあつた事が証明される。

黒耀石は、和田岬原産であり、石皿の安山岩、石斧の硬砂岩と粘板岩、井戸遺跡出土の縁泥片岩の石棒等は、四賀村内での产出が無いので、この時代すでに他地域との交流が行われていた事が知れる。

弥生時代

弥生時代の遺跡も又、四賀村地域には、僅少であるが狩猟中心の縄文時代を脱皮して、米作併用の金石併用の時代に進み、土地に定着したわけだが、今の所、その住居跡・集落を見ない、僅かに、土師器・須恵器・赤怒田遺跡からは、墨書の土師器の杯や、須恵器大甕瓦や弥生式土器の破片を発見出来るので、弥生文化を立証する僅かの遺物の発見が見られる。

古代

四賀村の古代に付いての記録に残るものは、四賀村召田（メスダ）にある、天道山縁起書に、滋野系譜なるものがある。

四賀村召田、天道山縁起書

滋野系図

神皇產靈神 五世の孫

中川村召田天道山ノ祭神也
天道根命

東人

神武天皇ノ朝
紀國造トナル

大和国葛野檜原ニヨリ檜原造ト称ス
天平勝宝元年（一四一〇）毅河守トナ

ル、姓伊蘇志臣ヲ賜ル

氏姓辞典（シゲノ）

二七三九頁

滋野氏系図

紀ノ国造

毅河守天平勝宝元年任

神魂命 天道根命

東人

正五位下伊蘇志臣姓賜ル
大學頭兼博士号名儒大和
國檜原造トナリ檜原称ス

五世ノ孫



この様に、この地方の古代を語る記事には、滋野氏の祖神として、天道根命を祀る神社がある。

又、滋野氏の本拠近くに、小県郡下郷に、生島足島神社の縁起書には、

生島足島神社は、太古より日本総鎮守と仰がれ、無双の古社で、神代天照大神の時、健御名方の命が諏訪の地に下降される時、この地に留り、生魂神・足魂神の二柱の大神に奉仕し、米粥を煮て献ぜられたと伝える。

生魂神||人々に力強い生命を予え、病氣平癒・災難を除け・安産を守護する。

足魂神||人々の願いに、満足を与えて、五穀豊穣・商売繁盛・受験縁結び等に靈験現たかな、神として昔より伝えられている。

又、「古事記」には、

健御名方命の記述には、出雲國譲りの神話の時、「父大國主命が、國譲りの交渉を認めたが、健御名方命は之に不服で、天照大神の使者と争い、敗れて須波湖の辺りまで逃れて来て捕われる。そしてこの地を絶対に出ないと言う事を約束して許された」と、古事記に記載され

又、「諏訪神社縁起絵巻」には、諏訪神社の明神「健

御名方命」が入諏する時地元神「守矢神」がこれを妨げて、天竜川出口の三沢藤島社と橋原曳矢社のあたりで、明神は藤の枝で、守矢神は鉄の歎を持つて相争う。然し明神が勝ち、その後は守矢神は、神長官として明神に仕える様になつたと。

以上の記述は、この地域の神話であるが、召田村天道神社にある、滋野系譜にある「神皇產靈神」と氏姓辞典の滋野系図の中にある「神魂命」と、生島神社の祭神の「生魂神」とは、同一神の様に見えるが、直接の繋がりは、見い出せない。



殿 本 宮 明 神

上古時代

信濃国は、元「科野国」と書かれ、「古事記」に載つてある。信濃の国初代の「国造」は、神武天皇の孫、神八井耳尊の子「建五百建命」と旧事記に記載されている。

信濃国は、南から伊那・諏訪・筑摩・安曇・佐久・小県・埴科・更級・水内・高井の十郡が置かれ、各郡にはそれぞれ郷が置かれた。四賀村は「錦服」（ニシキゴリ）郷の内となる。平安時代初期の「和名抄」によると筑摩郡には六郷が置かれた。

國を治める責任者が「国造」（クニノミヤツコ）その後「国司」に変り、その長官を守と言つたのは奈良時代の始めて、信濃国の初代国司は小治田朝臣宅持（オハルダノヤカモチ）で和銅元年の補任である。

その頃は、國府は小県郡の上田にあり、筑摩郡に移つたのは、七十年後、平安の始め、延暦年間に、松本に國府が移転した。

古代東山道

古代東山道は、伊那郡の神坂峠を越え、伊那路を北に上り、諏訪から雨境峠を越えて、小県郡・佐久に出るの

が古道（古東山道）であつた。

蝦夷征伐が問題となると、和銅年間には、美濃国笠ノ磨呂によつて開かれた、岐蘇路（木曾）を通り、松本平の國府を経て、越後の國府への路と、出羽（秋田・山形）の蝦夷を討つ為の要路となる。やがて、伊那から善知鳥峠（ウトウ）を越えて、松本平に直接入り、國府を通過して越後に通ずる新官道が出来た。

國府の移転に共ない、旧國府（小県郡上田）と新國府（松本）を通ずる往復路、及び上野・下野・会津への蝦夷地への道が必要となつて来る為に、「延喜式」には、錦服から保福寺峠を越えて、小県郡の浦野に出、亘理から佐久の清水・長倉を経て、錦水峠を越える道「墾道」（ハリミチ）を作り、中路としている。

この「墾道」は、稻倉峠を越え七嵐を下り錦服（現錦織部落の関宿が錦服駅）駅、これより右が、保福寺峠で中路と言い、左へ少し流れを下り会田村を経て立峠を越え、麻績より旧國府への道を「小路」とした。（現善光寺街道と言い、麻績より善光寺に通する旧道）

万葉集に「信濃路は、今の墾道刈ばねに、足踏ましむな、沓はけ我が背」と歌つてゐるのは、防人道として、新道が作られた事が知れ、奈良時代と推定される。

会田村より、立峠を越す道は、古くから善光寺道と言われてゐる古道である。

古墳の分布から、之等の道を見ると、官道開通前の古道は、松本から川平筋に出て明科に至り、眠り峠を越して筑北に出たものである。

古墳分布から見る限り、四賀村は無古墳地帯であるので、この時代には（古墳時代）官道は無かつたと思える

古代四賀村には、どの様な人達が住んでいたのでせうか。

松本地方では、筑摩郡の大領（郡長）に他田舎人國磨呂（オサダトネリ）が、山家郷には、物部の東人、戸口の小長谷部の尼磨呂が見え、高麗の帰化人、外從六位下、圭事真老や從八位下、前部の綱磨呂等、又時代が下つて、平安朝時代前期末には、同じく帰化人の辛大甘秋子や、坂名井繩磨呂等の名が見える。

諏訪神社の大祝として下降した「有員」は桓武天皇第五皇子で仁和二年（八八六）八十七歳にて没、と伝はる

四賀村関係では、清和天皇朝、貞觀六年の「統日本記」の中に「從五位下行、越後介高橋朝臣文室磨呂は、左京の人、本姓は膳（カシワデ）の臣、又の名は錦部、信濃の国の人也、五代の祖膳の臣金持、信濃國錦部氏の女を取り男倭を生む、是において倭、本族を尋ねず。

古代の居住者

母の姓をもつて、已が姓となす。すなはち信濃の国人につくる、中略、五男備後據正六位上彦嵯峨院に待す。天長五年に錦部を改め高橋の朝臣を賜う、後略、とある。この文は、越後の国の国司次官（介）の高橋文室磨呂が天長五年に没したが、本姓は膳の臣、又の姓は錦部と言つた。この姓は母の姓で信濃の国人であつたと、記されている。

この人物は、当然四賀村の錦部氏の本拠、本村の錦織郷の人と考へて良いので、四賀村関係の正史に名の出ている最古の人と言える。

寺院

仏教的遺物としては、官寺定額寺としては、錦織寺が当地に置かれた事は、古代寺院の内、国分寺と共に費用が国から出された寺院で、筑摩・安曇両郡中、唯一の定期寺である事に注目したい。当時この地方が重要な交通路に當り、仏教の中心地ばかりでなく、文化的の中心地であつた事を物語るものである。現在の真言宗洞光寺の前身、錦織寺である。

木曾義仲の挙兵

中世

古代末、「平家物語」の中に、義仲が京都の平家一門を追落し、京都占領の時、御白河法皇と不和となり合戦に及ぼうとした、この時今井四郎兼平が義仲を諫め「これこそ以ての外の御大事に候へ。さればとて十善の君に向いまいさせて、如何で御合戦候うべき。只甲を脱ぎ、弓の弦をはづして降人に参らせ給ふべうもや候らん」。と言つた時、義仲が、「我、信濃を出でしより、小見・合田・の合戦より始め、北国にては砺波・黒坂・志雄坂・篠原・西国にては福隆寺・笠のせまり板倉城を攻めしかど、一度も敵に後を見せず云々」とあるので、義仲が小県郡依田城に、上州・信州の兵を集めて挙兵した当初に、会田・麻績地域で、合戦が有つた事が記載されている。

洞光寺。義仲兜石、麻績の木曾殿城等、これ等の地域に若干の伝説を残している。合田（会田）・小見（麻績）に合戦があつたか否かの信すべき程の根拠ありとは言えないが、付記して置く。

鎌倉時代

御厨神明宮と会田氏

鎌倉時代となると、信濃國も守護地頭が置かれ、武家政権の時代となる。昔、通つていた「延喜の官道」や宿駅にも変化が生じ、主要路は、政権の中心地鎌倉への道が通じ、鎌倉街道と呼ばれ、道が修復されたり、新設されたりして整備された。

四賀村を中心とした場合、昔の官道「小路」は、旧国府と新国府松本との間の道で、錦織から会田・麻績・上田であつたが、会田・麻績・善光寺・越後への道が、善光寺街道と呼ばれ、延喜の「中路」は、鎌倉街道となり又、府中松本より、三才山峠を越えて、小県郡から上州へ出て、鎌倉に達する道と、塩尻峠を越えて諏訪にて、甲州から鎌倉に通じる道があつた。

当時の松本は、国府の機能を失い、守護所が政治の中心地となる。始めに置かれた守護所は、小県郡の塩田平であった。

信濃守護は、始め頼朝の乳人である比企能員が承わり比企氏が亡んでからは、北条氏がなる。源氏三代亡んで

からは、塙田郷を領した北条氏が守護となる。塙田平に城を築き、塙田氏を称して、信濃を治めた。

地頭海野氏

小笠原氏

小笠原氏が守護職となつたのは、北条氏が鎌倉に亡んでからである。

四賀村に關係したものは、「神鳳抄」に「会田郷御厨」の名が出て来る。これは、伊勢の皇太神宮の御領地として、年貢の一部が納められ、皇太神宮の歳費として經營に當てられる。

文治二年（一一八六）「吾妻鏡」に貢納未済の庄名中には、見えないが。建久四年（一一九三）以前の「神鳳抄」の中には、会田御厨が見えるので、この時期に、麻績御厨から分化したものか。

（前略）

内宮麻績御厨 八ヶ条
内宮会田御厨 七十町
外宮長田御厨 （一名保科二百八十町）
内宮仁科御厨 四十町布十段（中略）
内宮矢原御厨 千八百九十一町

（後略）

諏訪上の宮の史料である「嘉暦頭役結番下知状」に依ると、会田御厨の海野信濃守入道と浅間普恩寺（北条基時）入道とが左右の頭役を勤めた記事があり、（以下岩下会田氏）引続き「諏訪御符礼之古書」に享徳四年（一四五五）御射山祭事の分担として、「会田岩下入道沙弥重阿、御符之礼一貫八百文、使一貫文、頭役十五貫文、奉行が礼云々」とあり、寛正二年（一四六二）御射山祭事に際し、「一上増会田岩下入道三河重阿、御符之礼三貫三百文、頭役二十貫」、又、文明十一年（一四七九）御射山明神御頭定の中に下増会田小岩井郷として「彼頭勤候条郷四ヶ条不勤仕候海野下野守氏貞彼符祝錢二貫別而路錢出候、使四郎殿頭役二十貫。」とあり、引続き海野会田氏の後を、岩下会田氏が頭役を勤めていた事がわかる。

この海野信濃入道とは、平安朝以来、佐久郡望月の牧を中心には根を張つて栄えた滋野氏の一派で、小県郡海野庄を根拠とし海野氏を称したものである。

海野氏は、滋野氏五代の孫従五位下武藏守則広を祖とし、重道・広道の代となつてから、始めて海野氏を名乗つたものである。

広道は、海野小太郎と称し、（七代あり）幸親も小太郎と称し、その子幸広は海野弥平四郎の称したが、木曾義

仲に従軍し、備中水島の合戦に侍大將として討死と、平家物語に出ている。その子幸氏は、源頼朝に仕え、小太郎を称す。弓の名手として、しばしば「吾妻鏡」に出来来る人物で、義仲の子義隆に付いて鎌倉にあり、義隆無き後、頼朝に入られ海野庄を安堵されている。

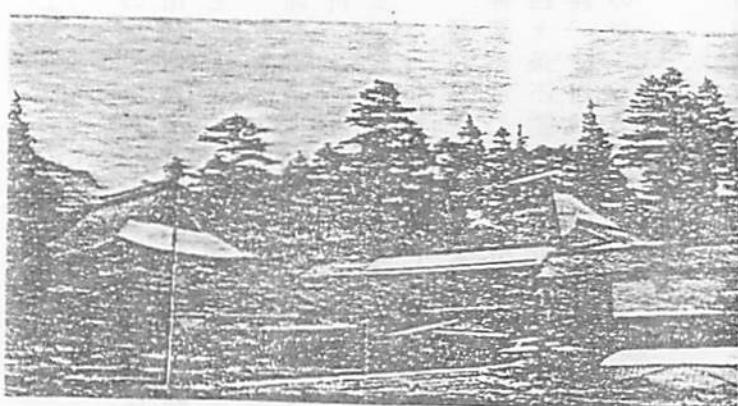
その子長氏、その長子茂氏は海野の本家を継ぎ、次子幸持は会田次郎を称し、幸次は塔ノ原三郎、幸国は田沢四郎、氏則は刈谷原五郎、幸元は光之六郎、幸春は真田七郎を称して、小県郡真田の庄を領して、真田氏の祖となつてゐる。鎌倉時代初期の事にて、系譜に付いては種々の説があるが、会田次郎幸持の代に、海野小太郎よりの分系は事は事実である。

「真武内伝」の真田系図に依ると、海野氏十一代が幸継で、信濃守を称し、十二代長氏が幸春と変り、小太郎幸春となり、真田七郎幸春の代より海野総領家を継いでいる様になつてゐるが、実は、長子茂氏が海野小太郎を継ぎ、真田が海野総領家となつたのは、海野二十九代幸義が、武田・村上・諏訪の連合軍に敗れ、討死海野氏が断絶した後を、武田晴信の招きで、弟幸隆が海野総領家を相続し、岩下豊後守が、岩下邑に住み、真田を称しものである。

又、岩下氏も、海野小太郎依りの分系で、海野二十三代小太郎幸義の弟、豊後守幸久（玄蕃）が、岩下邑に住

して岩下氏を称し、後筑摩の会田氏が小笠原家（北朝方）に属する為、又は断絶かは不明だが、会田郷には、岩下豊後守が、岩下会田氏として名を連ねて、大塔合戦に海野幸義と共に反守護側で戦つてゐる。

会田郷の広田寺開基には、岩下豊後守とあり、又、諏訪神社の御符之札頭役も前々の通り奉仕している。



広田寺全景（会田氏の菩提寺）

右端に見えるは虚空蔵山峰の城、山内の左川をへだてて会田塚がある。

会田郷内の遺跡

城館

会田氏は、現在の会田小学校のある地に、殿村居館があり、その南を城下町とし、北にある虚空藏山に要害の城、「中の陣城」を主郭として「秋吉城」「見場城」があり、虚空藏山が要害山城といえる。この城を主軸として、同族刈谷原氏の城、「鷹巣根城」「荒神尾城」等、光ノ氏の城「仁場城」、塔ノ原氏の城「塔の原城」田沢氏の城「田沢城」と、同時代の構築によるもので、皆海野一族の拠しな城である。

中世の遺跡

海野氏は、所領を伊勢神宮に献上して、神明宮を奉祭し、地頭としてこの地に栄えたもので、文献上からも一応妥当である。

神社

神明宮は天照皇太神・諏訪神社は建御名方命・八幡宮は誉田別尊・稻荷社は豊受大明神・天満宮は菅原道真が祀られているが、四賀村には、日本神道史上不明の神と言われる御社宮司社（オシヤグジ様）がある。小社であるが、四賀村内には四社あり、郡下にも多く祠られている。この神は有史以前からの土着神であるうと言う。

錦部七嵐の白鳥神社も、その名の如く、古代からの開墾、開道の神で古代からの神である。

明らかに鎌倉時代成立の寺院と目されるものは、錦部保福寺部落にある保福寺と会田町の長安寺である。

錦部

寺院

保福寺は、曹洞宗、長安寺は臨済宗共に鎌倉時代、高僧蘭渓道隆すなはち大覺禪師の開山である。

寺院の創立には、必ず本願の主である開基者大壇那が居るはずであるが、両寺共その名が見えない、大壇那某氏の滅亡理由によるものと思はれる。長安寺は、場所的に見て、海野会田氏と見て良いが、保福寺の場合は、當時の記録が無いので不明である。

両寺にある、長安寺の大覺禪師像、保福寺の千手觀音像は、鎌倉時代の作であり、同時代の四賀村の文化を物語るものである。

奉祭されたものである。

南北朝時代

南北朝時代になると、信濃の形勢は一変し、足利尊氏の武家方と、後醍醐天皇を中心とする宮方との争いになるが、

北条高時の鎌倉幕府が、新田義貞に攻められ、鎌倉が亡びると、鎌倉幕府の領国であつた信濃國は、信濃守護職、小県郡塙田に城を構える北条国時は、高時と共に亡び、筑摩郡浅間郷の地頭北条基時も自殺、その子京都六波羅探題の仲時も、宮方に攻められ、江近の国で自殺、山家の郷（山辺）の地頭、神の為頼も諏訪氏と共に鎌倉に亡び、建武中興が成り、京都から国司が派遣され、又、松本井川城に小笠原貞宗が、伊那より進出したが、北条高時の子時行が、諏訪氏の支援で、高遠城で挙兵鎌倉を一時占領した。

建武中興は間もなく乱れ、武家方と宮方に別れて、再び戦乱が始まるが、この時信濃武士を大別すると、会田氏の本家の海野一族は、安曇の仁科氏と共に宮方に付き、足利尊氏の武家方は、新政幕府より信濃守護職に任せられた、小笠原氏と激しく抗争を繰返した。

小笠原に従属した松本の犬甘氏・桐原氏等が有るが、この頃の会田氏の動静は、文書資料の上では全く不明で

あるが、（四賀村村誌によると）会田氏は、御厨神明宮の地頭であり、本家の小県郡の海野家や、隣接の仁科氏が終始宮方として戦つてゐるので、当然宮方であつたと考えられる。とあるが、越谷会田出羽家系図によると、代々小笠原氏に属し従つてゐるので、武家方と言う事になる。（次郎幸持の代から会田氏称した海野会田氏の子孫の事）

南北朝の争乱は、約六十年続くが、室町幕府の三代將軍義満の時、漸く南北朝の統一がなされた。この時点で信濃國は、足利幕府の支配下に入り、小笠原氏の信濃守護統治が始まると、古代からの在地土豪は、心良しとせず、しばしば小笠原氏に対し、反抗を企てた。

小笠原氏との、抗争の代表的なものに、大塔合戦がある。

大塔合戦

応永六年（一三九九）府中小笠原氏四代の長秀の時、三代將軍足利義満より信濃守護職の補任を受け、全信濃の豪族に威力を示す為、精兵八百余騎を率いて信濃に下向、善光寺の守護所に入り、閲見式を行つた。

この時の長秀の豪慢不遜の態度に、諸将は不満を爆発させて、大文字一揆を催し、信濃国人等の、促により、

守護長秀軍を大塔城に破り、長秀を退信させた。

海野系岩下氏系図（小県郡史）

この戦で、大文字一揆に名を連ねた人々の中で、四賀村関係を「大塔記」に見ると、「海野宮内小輔幸義・舎弟中村弥平四郎・会田岩下・大吉・飛賀留（光）・田沢・塔原・後略」とあり、会田一党は小県郡の海野幸義の手に属して、小笠原長秀と戦い、長秀を京都に追いやる守護を失却させるが、この一揆方に、名を連ねて「岩下」とは、海野幸義の弟、岩下豊後守玄蕃である事に注目すべきである。

註、越谷会田出羽系図の中に、会田五郎左衛門尉兵衛大夫宗清、明徳三年八月二十八日、宗清小笠原信濃守長秀に属すとあり、守護長秀側である。

会田次郎幸持に始まる会田氏は、四賀村々誌・日本城郭全集等には、断絶したかと記されている。越谷会田出羽系図では、小笠原氏にその後も代々属しているので、会田郷を失つたが、小笠原の側近として小笠原領内にて仕えていた事であろう事が解る。

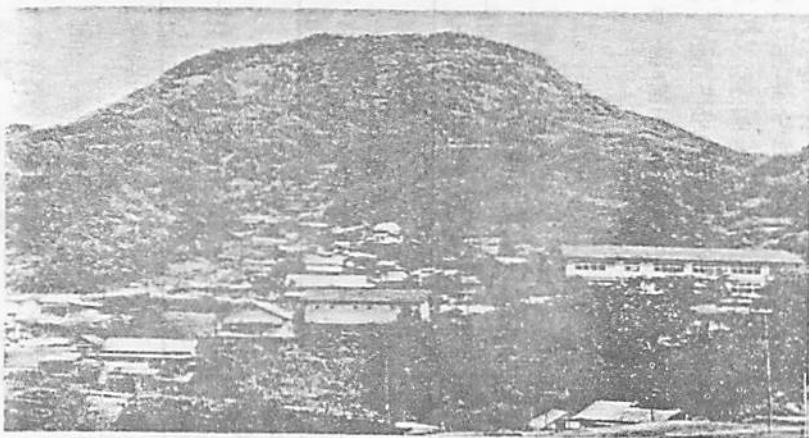
一方、会田郷には、本家海野氏二十三代幸義の弟、岩下豊後守幸久が、会田郷に入り以後、会田郷の記述はこの岩下会田氏のものとなるので、明徳三年（一三九二）より、大塔合戦の応永六年（一三九九）までの間に、海野会田氏と岩下会田氏との交替が行なわれた事となる。以後会田郷に関する会田氏は、総て岩下氏となる。

会田郷の寺院

- ◎長安寺は、開山が鎌倉期であるので、海野会田氏のものといえる。開基者名は消されている。
- ◎知見寺は、開基が岩下豊後守玄蕃である。
- ◎広田寺は、天文二十二年武田軍に焼かれた後、会田広政が、所領安堵された後、知見寺を再建の時寺名も敷地も今の處に改めたものである。

広田寺はその後、天正十年に至り小笠原貞慶に攻められ、同村内矢久の地に城砦を築き、一期ノ城と定め戦い、城将堀ノ内越前守は討死して落城、城主広忠は幼少にて青木に逃れるも五輪ノ尾根にて自害して果てたと言われ、岩下会田氏はここに亡んだ。この戦の時会田氏の居館も広田寺も焼かれた。後利天等俊和尚により、亡んだ会田一門の遺品を、寺の西北に塚を築きて収め、一門の靈を弔つた。今言う「会田塚」である。広田寺は、徳川の世となり新しく宿場が設けられて村も栄えたので、新しい壇徒により再建されたと言う。

その後、信濃の守護職は斯波義将に任命されたが、諸豪族は容易に従わず、一年三ヶ月で解任され、以後信濃国は幕府直轄領として支配され、幕府代官が入部している。応永三十二年（一四二五）十二月小笠原政康が守護に任じられるに及び、やつと信濃全体の頭領としての面目が出て来た。長秀の守護失却後二十五年目に至り小笠原政康により守護職復活がなされたのである。



空藏山城前面両瀬部落

武田の信濃侵攻と小笠原の没落

守護小笠原家が、一族相争つてゐる間に、甲斐の武田信虎は、信濃制覇を思い立ち度々侵入を繰返す様になる

永正七年（一五二〇）越後の長尾為景（謙信の父）越後国統一

永正十六年（一五二〇）甲斐の武田信虎（信玄の父）信濃進入を企て、佐久の平賀成頼を攻める。

享禄元年（一五二八）武田信虎諭訪に討入る。

天文元年（一五三二）府中小笠原長棟（長時の父）伊奈

天文七年（一五三八）武田信虎度々佐久に侵入、平賀成頼を殺して佐久大半を手中に納む。

天文十年（一五四二）海野幸義が武田信虎・諭訪頼重・村上義清との連合軍により亡ぼされる。

天文十一年（一五四三）武田晴信は諭訪に侵入、諭訪頼重を殺し諭訪を手中に入る。

天文十二年（一五四四）晴信、小県郡に侵入、長窪城を落す。

天文十三年（一五四五）真田幸隆、晴信の旗下に属す。海野總領家を継ぎ、旧領真田庄を安堵さる。

天文十四年（一五四六）晴信府中に侵入。上氏と戦い、晴信大敗し晴信も負傷する。

天文十七年（一五四九）正月十八日晴信、上田原戦に同、四月五日、小笠原長時・仁科・藤沢等は諭訪に討入、下宮迄放火。

同、四月二十五日村上氏、佐久に攻入り内山城・伴野城を奪回す。

同、六月十四日小笠原長時再び塙尻峠を越えて下宮に打入るも、武田に大敗す。

同、七月十日、塙尻峠の合戦で小笠原長時大敗す。

同、春日城を落す。

同、七月晴信、伊奈箕輪城攻め落す。

同、八月晴信、佐久桜井山城に入る。

同、九月晴信、小諸の平原城を放火、望月・伴野晴信の旗下となる。

天文十九年（一五五一）七月三日晴信、林城を攻めるべく、甲斐を進発す。

同、七月同日晴信、村井城に着陣（天文十七年塙尻を統一飯田領鈴岡城に次男信定を置く）。

同、同、十三日熊井城を落し、同日戌亥の城を落す

同、同、二十三日深志城自落、林本城破却

同、同、二十三日深志城歎立、惣普請城代馬場民部・日向大和

小笠原長時に最後まで従う者、犬甘・平瀬・刈谷原・麻績等わずかな武将のみであつた。

天文十九年（一五四〇）九月晴信、深志を発ち九日村上義清と砥石城に對したが、晴信軍敗れて退く。

同、十一月野々宮合戦に、長時方勝利、武田引く。

同、十二月中塔城合戦、小笠原長時は村上義清の援を得て、筑摩・安曇の総力を挙げて結集、深志城奪還すべく兵を催した。村上義清は筑摩塔ノ原城に進出、水室に陣す。長時の催促に応じた者は内には、先に反逆の者も皆帰復して従う。

上杉勢の反撃



洞光寺墓地の太田
兄弟（中沢氏）の五輪石
塔。（建碑は江戸時代となってか
らのもの）

同、九月小朔日麻績小四郎方へ来國光の刀遣は被れ
候、越後衆動、八幡破れ、新感城自落
同、同、三日土用、青柳を敵放火
同、同、虚空藏山城落居
同、同、十三夜、尾見、新戸、忍焼（中略）敵首七
室賀方討捕彼れ候（中略）
同、同、十五日甲刻御注進、敵夜中に除くの由来る
同、十六日堀村源太左衛門高名、敵仁内匠・林
津治部少輔・奥村大蔵少輔討捕（中略）為に御
褒美則源左衛門へ此に依り忠節百貫の地下彼れ
候（中略）
同、同、二十日越後衆退くの由巳刻申来る（下略）

以上記述は、甲斐武田の信濃進攻は南信・中信の各地
を完全に手中に納めた事が記されている。次の弘治・永
禄と変ると北信に於ける、川中島の決戦となる。

ここで重要な事は、天文二十二年三年二十九日に始ま
つた会田麻績討伐は、四月二十四日で終るが、次に九月
朔日に始まる、上杉勢の反撃である。

上杉勢は、北信川中島方面に退いてたが、九月に入る
と、体制をたて直し会田麻績の奪還を企てた。武田は麻
績小四郎元青柳に来國光の刀を与えて備えさせたが、そ
の勢に抗し切れず敗れている。

上杉勢は川中島方面より進攻し、八幡を破り、荒砥城
を奪回し、青柳城に放火して落し、会田虚空藏山城迄攻
め取つたが、同四日には目と鼻の先の刈屋原城に、武田
の援軍が到着して、再び会田城は攻められ落城する。
この戦の時、上杉勢の中に先の戦に一部は武田の軍門
に降つたが、それを心良しとせず（主戦派）上杉方に逃
れて援を求める者がいる事が知れる。四賀村々史では、真
田等の周旋により武田に降つた事になつてゐるが、中には強硬派もいて、全員が武田に降つたわけでは無のでは
ないか。上杉勢の応援にて一時ではあつても奪回に成功
している事は、会田の残党が先手を勤め悲願達成したと
断念して再起を期し、武州越谷に落て來た。
越ヶ谷瓜の蔓にある、「落居の節」「信州会田より郎
等六家同道にて罷越」とあるのは、この辺の事情を物語
つてゐるものである。

岩槻城主太田資正は、上杉の老臣で最後迄、北条氏に
頼向い遂に、政略的に岩槻城より追放となつた人物であ
る。逃れて來た会田一族は、この資正の厚遇により、越
谷一円を与えられ、「資」の字を授かつてゐる。
会田城の隣り、刈屋原城主の太田資忠も太田道灌の孫
で、小笠原無き後も孤塙を守り抜いた猛勇の武将であつ

会田氏の滅亡

小笠原貞慶の府中経略

(1)

織田信長の甲斐・信濃攻略の決意は、元亀三年に始まる。

同、十一月十九日武田晴信の、朝倉左衛門督に宛てた書状に、「対信長当敵、干才動候」と当面の敵は信長と述べている。この為信長は謙信と同盟を結ぶ。

同、十二月二十日織田信長より上杉謙信に送る書状に、武田信玄と一戦を交える決意を表明している。信長と呼応して、一挙に信濃に攻め入り晴信を討つ事を呼びかけている。

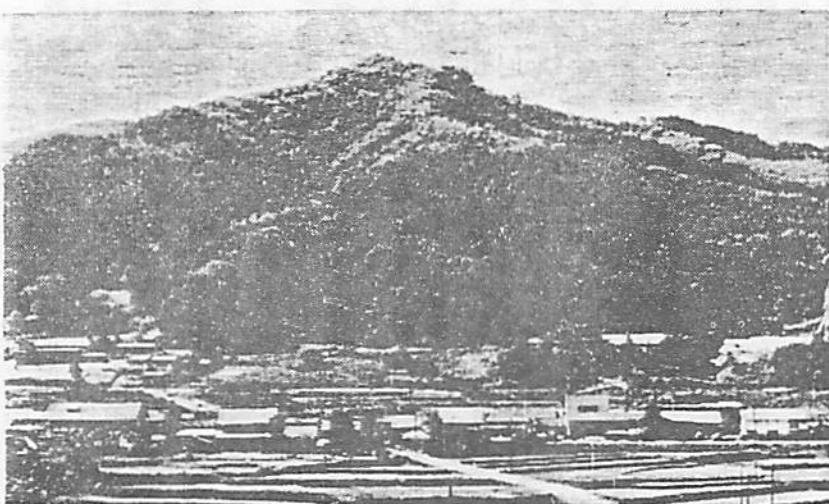
同、十二月二十二日徳川織田連合軍は、遠江の三方原で武田軍に敗れ、家康は三河まで侵略される。

天正元年（一五七三）二月中旬には、家康の城野田城を攻め取られるが、武田晴信は、この城攻め中に病を得て帰国の途中、四月二十二日伊奈駒場にて卒す。

(2)

小笠原貞慶が信濃回復を企てる兆しは天正三年二月二十六日織田信長に、府中復帰を誘われてからである。以来小笠原貞慶は、信長に属し、信長の使者として各地の将に書状を送る使者として、小笠原貞慶の名が見える。

天正五年極月二十二日には北条氏政に敵対する、佐竹義重の党、太田資正・梶原政景父子に使をしていざる書状



矢久一期城 前面藤池・長越部落会田小次最後の城

二十八日勝頼は、諏訪上原城を引き払い、甲斐新府の館に兵を引く。深志城は木曾義昌の手に落ちた。

天正九年十月十五日付、信長越前出陣の前触れ等信長の使として走り廻っている。

武田勝頼の滅亡

信長の、甲斐討略は、天正十年二月一日、木曾義昌の信長出陣の要請に始まる。此の日突然安土城に、美濃苗木城主苗木久兵衛（遠山友政）から使者がとどいた。此の時義昌は、弟の上松藏人を人質に添え差出して忠誠を誓つた。

木曾義昌の謀叛の報は、武田方にも伝わり、二月二日には武田勝頼・信勝父子。弟信豊等は、甲斐蘿崎の新府城自一万五千の兵を率い、諏訪上原城に陣を構えると共に、諸々の口を固め信長の侵入に備えた。翌三日には、信長は、武田追討計画に基き、甲斐信濃への出陣を諸将に命じた。駿河口から三河の徳川家康・関東口から小田原の北条氏政・飛驒口から金森五郎が進撃を開始し、又信忠等の安土勢は、木曾口・岩村口の二手に分かれて駆を進めた。六日伊豆より河尻与兵衛が戦列に加わり、甲斐信濃は完全に包囲された。信濃の動搖も激しく、在地武将の離反が続く。二月十六日古幡・西牧氏が木曾義昌に内通、岩岡・織部も深志を離反。十八日二木一門も甲州方面離れ、小笠原信謙も下伊那

にて織田方に走る。

二十九日勝頼は、上杉景勝に援軍を求めた。

二十五日甲斐にて穴山信伊謀叛。

貞慶の府中平定

小笠原貞慶は、府中深志の回復に当たり成功したのは、

(1) 此の度の入府に当たり事前に、旧臣や恩顧の者に対し、恩賞や所領安堵あるいは、宛行を約束して懷柔策を出した。その結果塙尻へ貞慶が来た時には、譜代旧臣の参考となつたのである。

(2) 貞慶を迎える下地として、小笠原貞種（父長時の舍弟）洞雪の重臣に対する府中武士の失望があげられる。貞種洞雪を迎えたのは、「家筋」によつて府中の安定を求めたものであつたが、上杉から派遣された梶田・八代の二人は、洞雪に政治の事をまかせず、我尽な振舞が多々、小笠原譜代の与望を失う結果となつた。上杉勢の深志在城は旧臣達の思惑とは別なもので、好ましいものでは無くなつた。

(3) 小笠原家嫡流である貞慶の行方を付き止めた譜代が、積極的に還座を計つた。

旧臣等の内二木一門・征矢野等の譜代が、起請文を書いて、三河の家康のもとで牢人していた貞慶に、還座の決意を促した。

此の様な事情で、府中を回復する事が出来た小笠原貞慶は、早速府中の統一平定に乗り出した。

三月二日仁科五郎盛信の死守する高遠城落る。

十一日甲斐新府の館に火をかけ、天目山に逃れた勝頼は自刃す。甲斐信濃の支配者武田氏はここに滅亡した。之により、甲斐信濃は、完全に信長の支配下に置かれる。

十七日信長は、飯田を立ち、杖突峰を越えて諏訪に入

る。十九日上諏訪の法華寺にて、甲斐・信濃の武将が拝謁に參集、甲斐から徳川家康到来。

二十日木曾義昌出仕、太刀一腰・馬二疋・金二百両を進貢した。織田信長は、義昌の今度の戦功を称えて、黃金二千両を贈り本領を安堵し、更に安曇・筑摩の二郡を与える事を約束、帰り際に寺の縁まで見送る程の持て成しであつたと云う。

松尾の小笠原信嶺出仕、本領を安堵さる。

二十一日武田の猛将穴田信尹（梅雪）出仕、甲斐・駿河の本領を安堵された。

二十四日在陣諸将に、深志の城米を分け与え、北条氏政より、白米二千石、徳川家康より兵糧の進上あり、諸將士に宛がわれた。

濃は再び無主の状態となる。

東からは北条氏政が、北から上杉景勝が、南より徳川家康が、内より旧族が旧領回復を計り、動乱の様相を程して來た。

六年十二日小笠原貞慶は、徳川家康の援を得て、信濃府中に還座の為「家康御光を以て入国を行、偏へにその方覺悟に候」と後序氏に忠節を催している。

十三日上杉景勝は、更級郡清水三河守に、臣下に下る様求めていた。在信旧配下の諸将には皆、誘いの書状が出されたものと思はれ、景勝に味方する者が多くなつた十六一十八日北信の上杉配下の武将に旧領安堵すると共に、所領を宛行つていて。

景勝は、川中島より麻績・青柳・会田を降して府中に入り、深志の木曾義昌を攻め破り、当時越後の上杉を頼つていた、小笠原長時の弟貞種を城主に迎えて、小笠原の旧臣の多い安曇・筑摩の抑えとした。

七月十六日予てから旧領府中回復をねらつて、長時の子貞慶が、安筑の旧臣を率いて、上杉方の守る深志を攻めた為、貞種は正統である貞慶に城を開け渡し越後に退き、長時の子貞慶が安曇・筑摩を支配する事となつた。ここに長時が旧領を失つて以来の念願の、府中えの遷座を成し得たのである。

云つた。

天正十年三月、飛驒越えをして安曇の金松寺に入つた時には、旧重臣二木氏すら小笠原貞慶の存在を知らなかつた。貞慶は天文十四年生れ、林城没落の時六歳であつた。長時の三男として信府林の館に生れ、童名小僧丸と

天正十年（一五七三）六月二日、本能寺の変により、織田信長が倒れる。新支配が確立されたかに見えた、信

本能寺の変と深志

才知・氣質特に優れたる為、父の寵愛と期待を一身に集め「家法を悉く、これに伝ふ」と、弓馬兵法と行儀の法度を継ぐ。

長時は、没落後上京して三好長慶を頼り、摂津の芥川城に十五年逗留、永禄十一年九月二十八日、信長に攻められ落城、越後に御下着、上杉輝虎賓客の礼を以て迎えられる。その後芦名氏を頼つて会津に至り、星味庵にて三年余り、天正十一年春不慮の死をとげる。

貞慶は、信長を頼み、十四・五年の間、関東・奥州に計策を廻し、小笠原家再興に奔走していた。天正十年三月、飛驒から入り安曇の金松寺に着き、府中深志を規うが、信長の所領宛行の後の為、目通りもかなわずに引さがつた。失意の貞慶は、信長を離れる。その後徳川家康を頼り寄食す。本能寺の変の後、石川数馬の取なしで、家康の援を受けて、遂に同七月府中深志を回復する事に成功した。

註「この会田氏とは、鎌倉時代から会田御厨の地頭として入居した海野氏とは別である。海野氏の一系ではあるが小県郡岩下に分系した岩下氏であるが、同じく会田氏を名乗つていて、武田清信の進攻の際、塔ノ原氏等と共に小笠原に叛いて、武田に降り、武田治政下ではその軍役を勤めていたが、武田滅亡後は上杉に降り、松本に貞慶入府後も上杉に内通していた為、一早く貞慶から報復処置をされた。」

落城の時、会田小次郎広忠幼少の為、堀ノ内越前守などが旧来の会田城の地から數キロ、小県郡寄りの矢久に新城塞を築き、之を決戦場としたので、後世「一期の城」として伝えられたが、江戸時代の俗書に「覆盆子の城」と記されているが言葉の転化である。小次郎は決死の戦に敗れ、小県郡青木に逃れて五輪の尾根で自殺して果てたと伝えられている。

この時会田氏は亡び、寺も城も兵火に焼かれ死んだが、この時住職は開基の位牌と過去帳を抱いて山中に難を避け、翌年寺の西北に会田塚を築いて、遺品を収め会田氏一類の亡靈を弔つた。今もしだれ桜の古木の下にこの塚が残り、自然石の石仏一基悲しく立つている。会田氏はここに全く死んで、この地方は小笠原氏の領有に帰した。

此の戦には、鉄砲が多数使用された事が知れる「鉄砲

会田氏の征伐

本能寺の変以後、松本以北は上杉景勝が侵入し、事なく其の勢力下に置かれていた。会田氏も「午の十一月会如田ノ城ノ者共、越後へ内通仕、河中島依合力ヲ乞、矢久のノ入ニ小屋ヲ立居申候」と、会田村より数丁奥の矢久の地に砦を新設して、越後の応援で小笠原に対抗していめた。が、小笠原貞慶は、天正十年十一月三日から会田を攻め、日を経ずしてこれを落とした。

今筑摩郡に会田姓の者、一軒も残らずと云う。

上田城



上田市須川小牧城跡よりの上田市全景



天文19年(1550)7月2日 真田幸隆宛武田信玄宛行状

(長野市 真田宝物館蔵)

其の方年來の忠信、祝
着に候。然らば本意の
上に於て、誠方方參百
貫并びに横田遺跡上条、
都合千貫の所これを進
じ候。恐々謹言。

天文十九年七月二日

晴信(花押)

真田弾正忠殿

上田城

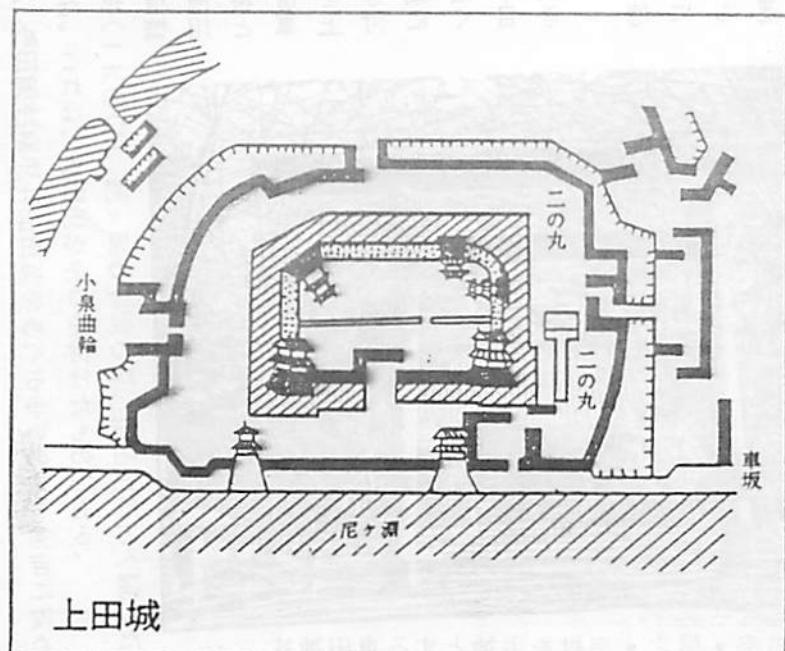
(1)尼ヶ淵城、伊勢守城
(2)上田市上田
(3)真田城 (4)真田昌幸、仙石忠政
(5)天正十一年、寛永三年
(6)石垣、堀、櫓

尼ヶ淵に面するこの地には、昔、小泉氏一族の砦があった。天正十一年(一五八三)、真田昌幸は古城の地に築城の工事を起こし、以前の城とは比較にならない規模の大きな城を築いた。翌十二年完成し、上田城と称した。

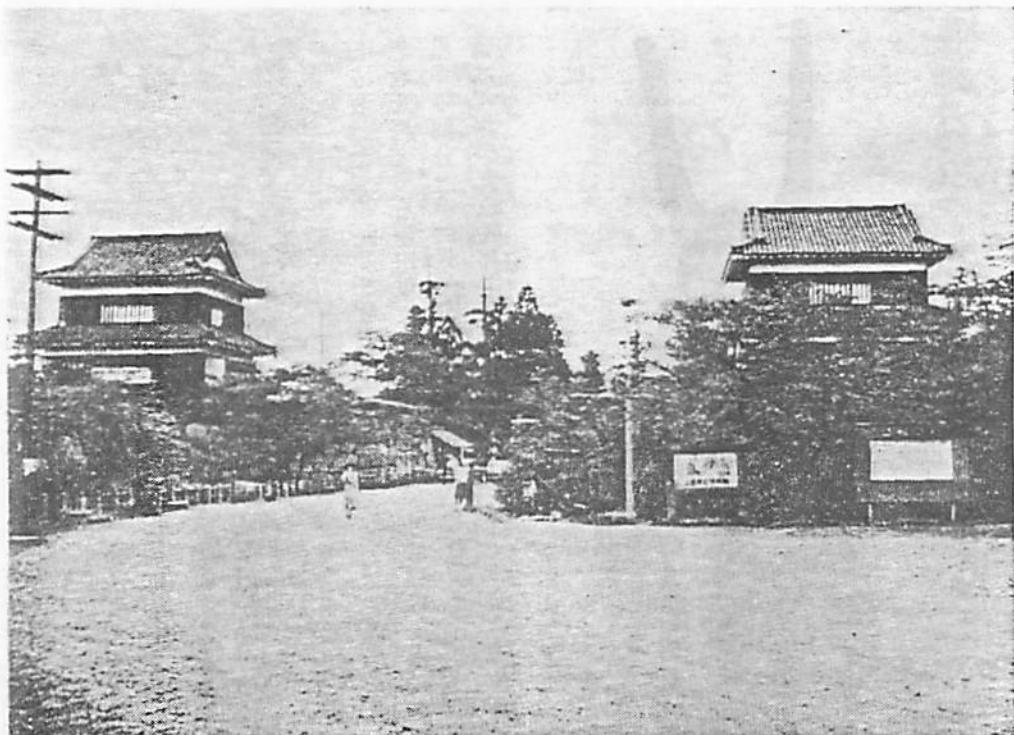
城が完成した翌天正十三年、徳川氏との領地争いで、徳川軍の攻撃を受けた(第一次上田合戦)。その時の戦いで、鳥居元忠、大久保忠世を将とする徳川軍は、昔の楠木正成の戦法にも比較される真田昌幸の戦い上手にかき回されて、さくざんの敗北を喫した。徳川家康は、井伊直政に兵を預け、援軍として送ったが、真田氏の味方に



昌幸の鎧(長野市 真田宝物館蔵)



上田城



上田城の櫓

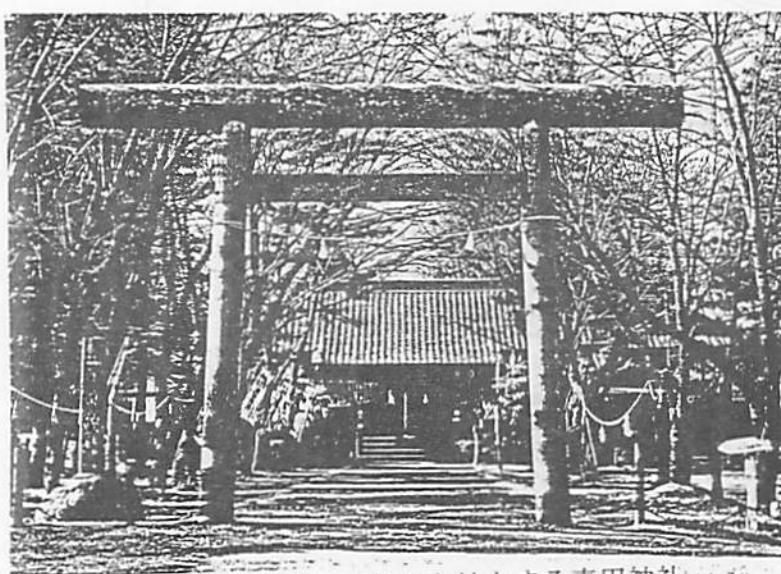
田昌幸、信繁父子は、徳川秀忠を大將とする中山道軍三万六千を上田城に引き付けて、合戦に間に合わなくするという目ざましい働きをした。

しかし、徳川方の勝利に終わったのちの真田氏の運命は、徳川家康の胸一つでどうにでもな

越後から上杉景勝の軍が来ると聞いて、上田城付近に陣を布いたままで目立った動きはしなかった。そうして、豊臣秀吉の仲介で両家は和解した。

その後、小田原北条氏は沼田城をめぐる争いの末、秀吉に攻められ没落した。これは、真田氏が糸口を付けたものである。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦の時、石田三成方へ属した真



昌幸・信之・幸村を主神とする真田神社

つ
た。

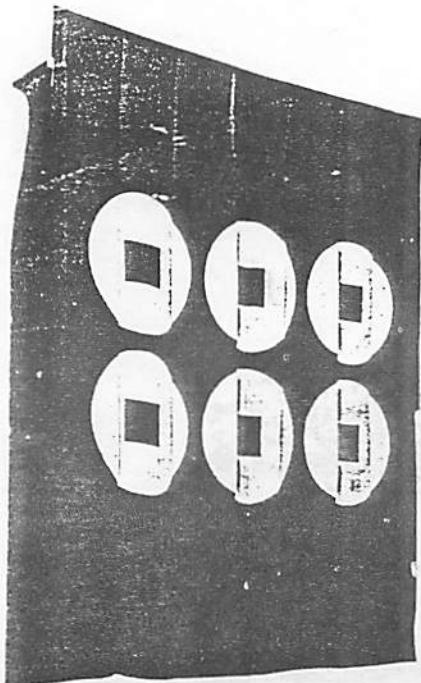
この時、父弟と別れて徳川方に属した真田信之の助命嘆願によつて、真田昌幸、信繁父子は高野山へ配流と決まつた。

真田氏の上田開城後、城は破却されたままであった。

その後、真田信之が上田を領したが、徳川氏に遠慮をして城は築かず、館に居住した。元和八年（一六二二）、真田信之が松代へ移封となつたあと、小諸城より転じた仙石忠政が入城した。

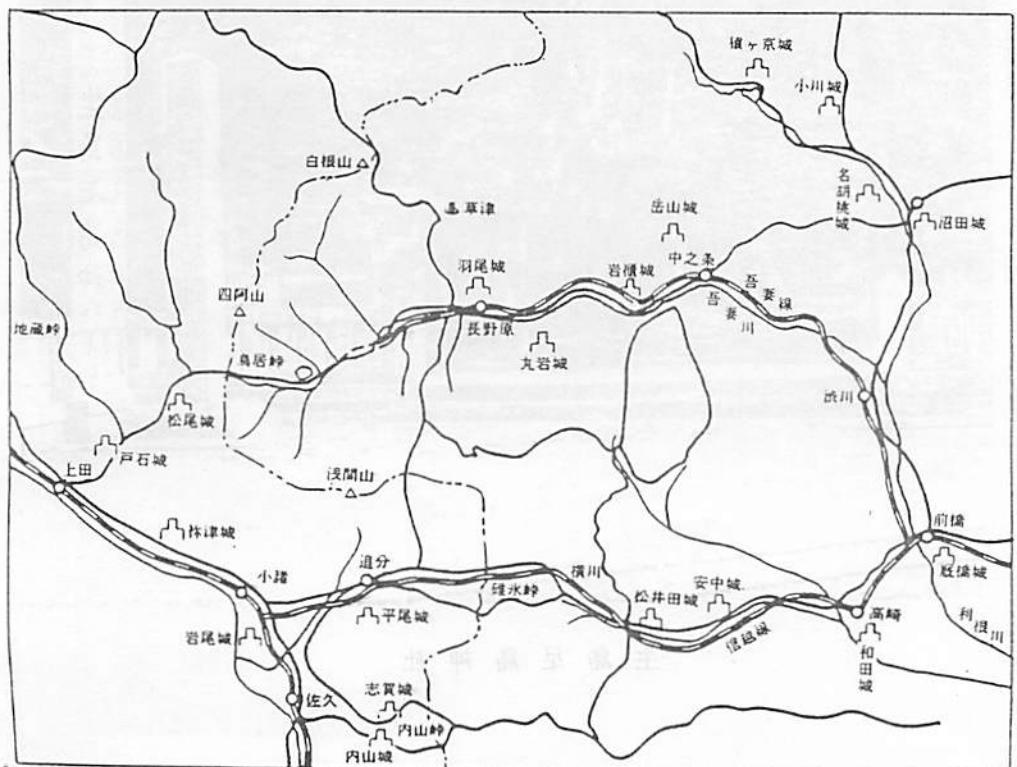
宝永三年(一七〇六)、松平(藤井)忠周が但馬出石より仙石氏と交代で入城し、代々続いた。

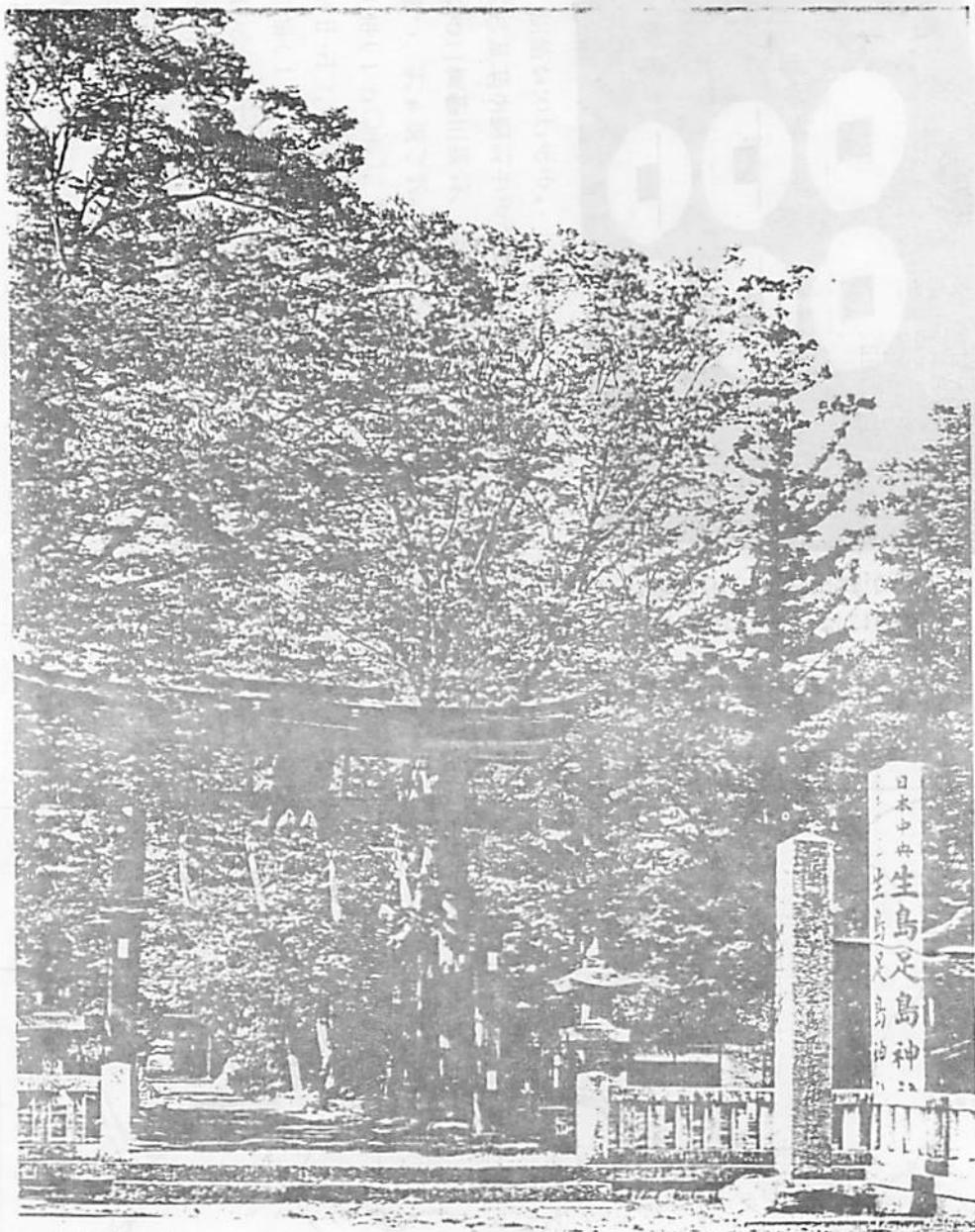
現在残る二重櫓三棟は、仙石忠政が修築した時のものである。眞田氏時代の城址を偲ばせるものは、西方二の丸の外にある小泉曲輪の土壘、空堀などである。



真田幸隆が武田信玄より拝領した
陣鐘には弘治3年作銘

真田関係城跡





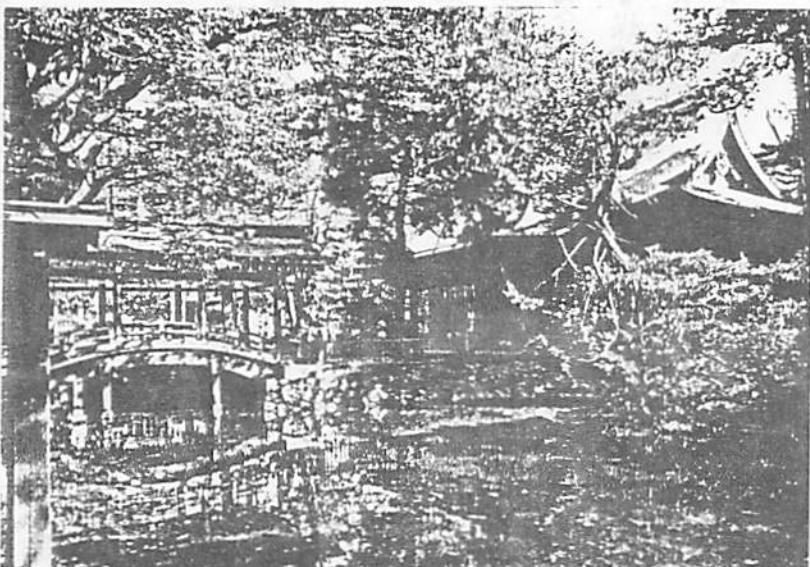
生島足島神社

生島足島神社

國幣中社・生島足島神社。

東嶽田村大字下之郷字中池西
にあり。祭神は生魂神・足魂神
合殿に建御名方刀美命・八重
事代主命。創建年月日詳なら
ず。延喜式に小縣郡生島足島
神社とあるは是なりといふ。

社傳、神祇志に生島足島神社二
座、今在下郷村、與神祇官
生島巫所_レ祀同神也。大正元
年、定本國封一戸。大日、本史、建治
年中北條陸奥守道祐_レ嶽田に閑
居し、社殿を營繕し大鐘を寄
進す。天明二年改銘 天文・弘治・永
錄年中武田晴信及其幕下の寄
依最厚く、天文二十二年八月
十四日、晴信下之郷上下宮に



生島足島神社

社領の案堵狀を發す。永祿二
年九月一日又晴信同じく願狀
を納む。永祿九年十年には信
玄の幕下社頭にて誓約起請
す。文書今尙八十餘通を存す。
案堵狀、願狀、起請文 天正十二年真田昌幸
神門祭用の柳木伐採を許す、
慶長六年神領四十貫を寄進し
同十三年六月十三日下之郷本
領分十五貫文を寄進す、合せ
て五十五貫文、これを以て社
殿營繕、諸費の基資にあて、
並に神主・神部・巫女・社丁・社
寺諸坊・修驗等の給にあつ。
同社古文書 同十五年三月眞田信幸
北社を再建す、棟札に「當社

再興之事、真田伊豆守信幸公二拾貫文御寄進、依レ之令ニ造立之材木取ニ山田之郷木ニ、一二而令ニ皆調ニ者也、本願ノ志神主工藤七郎神慮之以勵ニ再興ニト號、入目は五百俵、大工マテ八百人入者也、然者飯島宗心繩垂ニ公請誠御取モトメ番匠一切ノ入目差引、肝煎如レ此也、依レ之現當ニ世願望無レ疑者也、野僧俊翁造ニ之迎日六種之供具調、郷中貴賤男女積善之餘慶以內界外界郡生ニ味之法雨速到密嚴土者也、初に梵字梵文あり、裏に慶長十
五年庚戌三月三日さあり。

元和八年仙石忠政領主となり神領を永八貫七百三十文とす。寛政年中吉田家より社號の復稱を許可せらる境內社に八幡社・子安社・秋葉社・十三社・荒魂社あり、明治維新の際神官十二名を以て勤めしも、同六年其世襲を解かる。同年五月縣社兼郷社に列せらる、祠官一名・祠掌三名を屬せしむ、同三十二年七月十九日國幣中社に列せらる。同四十四年五月御旅所社、山宮社の無格社を境内に編入す。南本社・拜殿・祝詞殿・籠殿・渡殿・神庫・玉垣・廊橋と、北本社・拜殿・祝詞殿・御饌殿・直會殿・水舍・匠家・雜具庫・玉垣と、東門・西門・東鳥居・西鳥居・玉垣・禁札柵二束二四を具備し、境内三千九百二十二坪。氏子百九十五戸。祭儀には名神祭・荒魂祭・射初式・直會式・御門祭・木却祭・附ト神事・神位祭・祈年祭・蠶銅祭・御柱祭・御釜納神事・還座神事・本殿祭・清淨祭・大祓・御歲代種時祭・祇園天王降・昇格紀念祭・御歲代埴苗祭・祇園祭・注連縄張替式・御射山神事・田面神事・例祭・新嘗祭・井神祭・御釜清祭・御移神事・煤拂神事・注連飾神事・越年祭等あり。明細帳、神社

生島足島の神社の廢まり涌出づるみならしの水を。

千早猿神代ながらに萬代もかれひいほのみたらしの水。(題かづら)霧島真蔭

生嶋足島神社起請文。

永祿十年八月、武田信玄部下の將士大に小縣郡生島足島神社に起請す。起請文は古くは事を發起して主上に奏請する表文をいひしが、後世に至りては神佛を勧請して赤心を表したる誓詞をいへり。永祿四年十月川中島後役やみて、其の十一月信玄は佐久郡松原神社に願狀を捧げたり。狀中に引辛吾軍於上州之日、詣松原上下大明神寶殿、其意趣に殆西牧、高田、諏訪之三城、不經二十有日、而或降幕下、或擊碎、散亡者、偏可有當社保護云々と見松原神社文書五年二月信玄北條氏康の請に應じて太田三樂の松山城を抜く、上杉景虎來り援ふ、及ばず。六年二月信玄西上野七郡を領す、同三月上杉輝虎即ち影虎上野に入り伊勢崎城を陥る。同十一月信玄北條氏政と兵を合せて上野に入る。七年三月幕府輝虎、北條氏康に諭して講和せしむ。同八月武田・上杉兩氏亦始て和を講す、茲に於い上信の折衝やむ。八年二月信玄は諏訪郡諏訪神社に願狀を捧ぐ、狀中に二月七日涓而爲吉日良刻、任天道之運數、引卒甲兵於上州利根河西之日、先詣諏訪上宮明神、其意趣殆箕輪之城不經十日而擊碎散亡者必矣云々と上野を定めんとの意あり。同年六月信玄越中に入り、九年五月輝虎越中を畧す。甲越の折衝又此方面に起れるが如くにして、同閏八月十三日信玄上野國を畧し、翌九月其の將内藤昌豊を上野箕輪城に置けり。小縣郡生島足島神社に於ける起請文中、三枝宗口助昌貞のは此の年閏八月二十日にして、長坂源五郎昌由のと、武藤神右衛門のとは此年閏八月二十三日に起請せるものにして、信玄が上野國を畧取せる

十日前後のことなり
同社起請文

敬白起請文（横九寸八分
一尺四寸一分）

文

一、以知行並賄賂以下之所得、雖相報方候、奉對當御屋形様、不可企逆心之事。

一、以細事、奉對御屋形様、理不盡に不可存述願事。

一、御氣色惡人並御家中之大身江不可致入魂之事。

右雖爲一事存違犯者、蒙梵天、帝釋、四大天王、惣而日本國中、大小之神祇、殊に者八幡大菩薩、富士淺間大菩薩、熊野三所大樞現、
謹訪上下大明神、甲州一二三大明神、別而者御旗拂無之御罰、於今生享癱病、至當來者、可致墮在無間地獄者也、仍如件。

永祿九年丙寅

長坂源五郎

壬八月廿三日

昌

由花押

金丸平八郎殿

敬白起請文之事

意趣者

一、自今以後今井次郎左衛門與入魂致間敷候、同陳屋甲州衆所へ出入仕間敷事。

一、向後朋友□□並徒黨立間敷事。

一、奉對御屋形様、御後聞不可覺悟存事。

（神文は略前者に同じ。）

丙寅八月廿三日

武藤神右衛門

彦五郎殿人々中

生島足島神社起請文は、其の始幾何ありしか知るべからず、御本殿の土間此の宮特別の形式にして本殿内床板なしに數多ありしを後世發見し整理せるものなれば、其の頃既に腐朽せるもありしなるべし。永祿十年八月の起請文中の辭に「此の以前捧げ奉る數通の誓詞」と何れのものにも見ゆれば、此の年より前數通を起請して納めたること知るべし。

而して永祿十年八月の起請文を出したる同人にして、此の年以前の年月のもの無きを以て見れば、早く湮滅に歸せしなるべし。假りに此の年以前の起請を下之郷諏訪上下社に於いてなさざりとせば、何れかの神社に之あるべきも、未だこれに應ふる誓詞の遺存するを聞かざれば、此の想像當らずといへども近かるべし。又起請文を受けたる人も亦自ら起請文を己以外の人に出したるもの存するに、起請文を受けたる人にして此の人の出したる起請文の存せざる數も多ければ、永祿十年八月の起請文中にも痛く湮滅せるものあることを疑を容れず。更に本殿中より之を求めて整理し、番號を附して目録をも調製せし後、尙十通許の紛失あり、されば現存起請文は當初起請せる幾回かの一部分にして、何人かの一部分のもののみが、僥倖にも朽腐・湮滅・紛失の難を免れて嚴存するものなりと見るべし。永祿九年八月廿日のもの一通、同八月廿三日のもの二通、永祿十年八月七日のもの七十二通、同八月八日のもの八通、計八十三通を現存數となす。舊誓詞寫によれば總數九十三通あり、されば此の整理以後十通の紛失ありしこと知らるべし。起請文の用紙は楮紙を用ひたるが如し。其の大さは一枚用紙にては堅七寸三分、横九寸三分位より、堅一尺、横一尺五寸位何れも裏打して四周をたら切りたれば原形よ。り小さか二三枚繕ぎは堅七寸四分位より九寸位まで、横二尺位より三尺四分位までのものあり。故に用紙の大きさには畳二種と見るべし、此の二種何れも午王にして、寶珠、群鴉を墨もて刷出し、中には更に大寶珠を朱にて刷り加へたるものあり、普通此の午王を「鴉ごー」と呼ぶは「鴉午王」の約言なり、社人の言によれば此の午王は碓氷の熊野午王なりといふ。何れも始めに誓詞を書し、終に神文を書し、年號・干支・月日を記し、氏名、花押を署し更に血判を施し、最後に宛つべき氏名を書きたり。

誓詞を出したる人を起請文中より總計すれば三百三十八名にして、誓詞を受けたる人は總計十六人なり。誓詞を出したる二百三十八名は遺文年表中に收めたれば就きて見るべし。誓詞を受けたる人は、吉田左近助三十九通に見ゆ、淺利右馬助三十四通に見ゆ、山縣三郎兵衛十通に見ゆ、金丸平八郎八通に見ゆ、跡部大炊助七通に見ゆ、原隼人佐三通に見ゆ、曾根三河守、熊井出對馬守以上二通に見ゆ、彦五郎、春日彈正忠、小幡三河守、金子與三郎、六郎次郎、水上菅兵衛尉、甘利左衛門尉、大利左衛兵尉以上一通に見ゆ等にして、兩奉行宛三通に見ゆ、奉行宛二通に見ゆ等せるもあり、宛名無きもあり、五通に見ゆ是

等誓詞を受けたる人の出したるものには、吉田左近助が跡部大炊助に、淺利右馬助が金丸平八郎に、山縣三郎兵衛・原隼人・小幡三河守・六郎次郎等は吉田左近助・淺利右馬助兩名に宛てたり。其他のものは現存
中に見えず。

更に誓詞を出せる武人の地方別を見んか、小縣郡にては、東在地方に海野幸貞・同幸忠・同信勝と、及び海野衆十二名、禰津常安と、及び禰津被官九名、岩下衆九名あり。小泉浦野地方に小泉重永・同宗貞と、及び小泉被官八名、室賀信俊・同經秀・同正吉・同吉久・堀田之吉・浦野幸次と、及び浦野被官六名あり、小縣郡外にては佐久郡伴野信豊及び野澤衆、上野國安中景繁及び安中衆、小幡信尚等四名及び小幡親類衆、仁科盛政及び仁科親類被官衆、小笠原信貴及び小笠原被官衆、六郎次郎及び六郎次郎同心衆、小山田信茂及び小山田被官衆六河衆、高山衆、山中衆、北方衆、長根衆、南牧衆、青柳被官衆、鐵砲衆等は其の所屬稍明記あれども、何處なるか詳になし難きものあり、更にこれ以外にありては氏名のみなれば殆ど推察だに能はざるもの多し。然れども地方史の研讀と相俟たばいつかは明になしうる時機の至るを見るべし。

敬白 起請文之事

（横七寸五分
縦二尺三分）

一 松鶴軒の 同 上 一 同 上 一 同 上 なれど逆心
に同文 上 の下に候字なし 一 同上なれど別而
を認別となす 一家中之者云々

一、下野守親子奉對上意様、逆心之旨存候者、隨分致意見、承引無之者、彼親子之前引切甲州へ可奉抽
忠節之事。

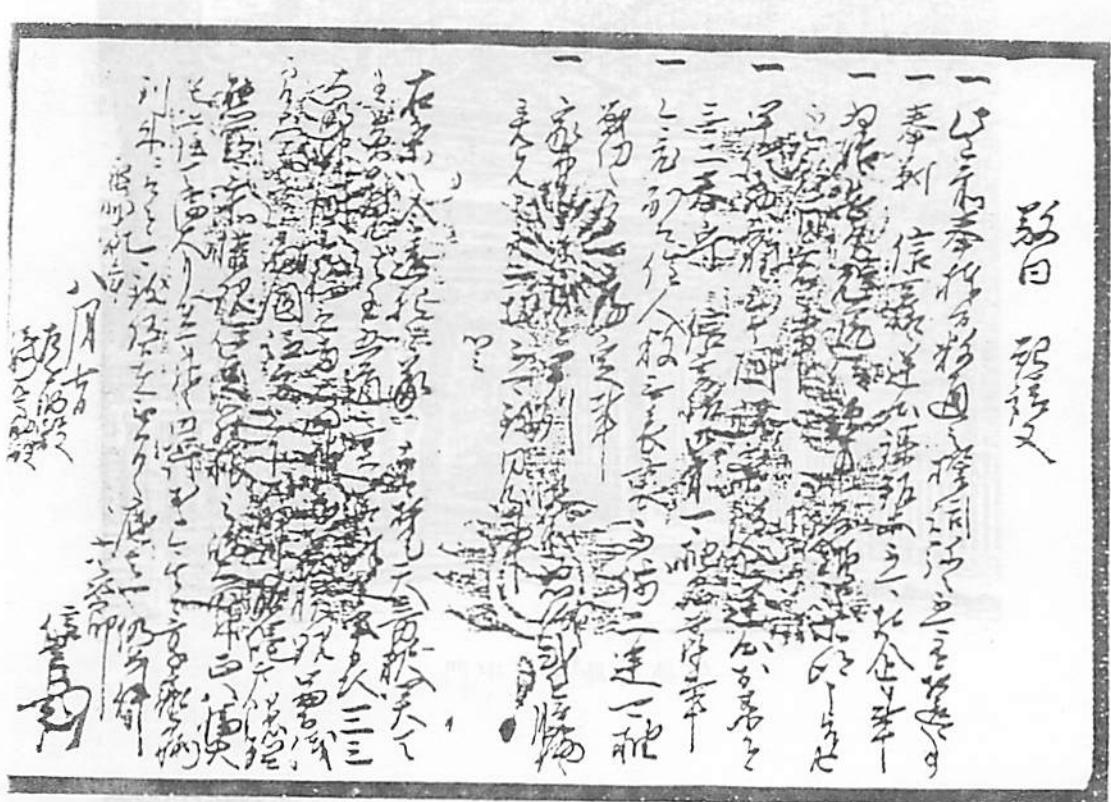
右意趣少も僞申候者

上梵天、帝釋、四大天王、下内外海外海龍王、龍神、熊野三所權現、賀茂、春日、稻荷、祇園、日吉、住吉、八幡大菩薩、富士淺間大菩薩、諭訪上下大明神、別而甲州一二三大明神、御嶽權現御罰蒙、於今生
者黑白受二病、於來世者可致墮在阿鼻無間地獄者也、仍起請文如斯。

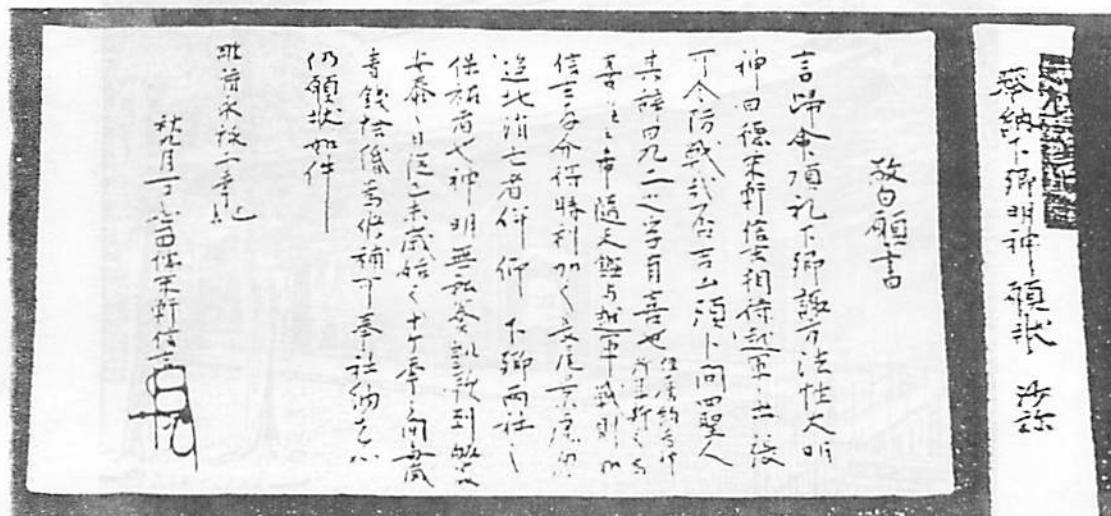
永祿十年丁卯八月七日

（岩下衆のもの岩下駿河
守外遺文に續る）

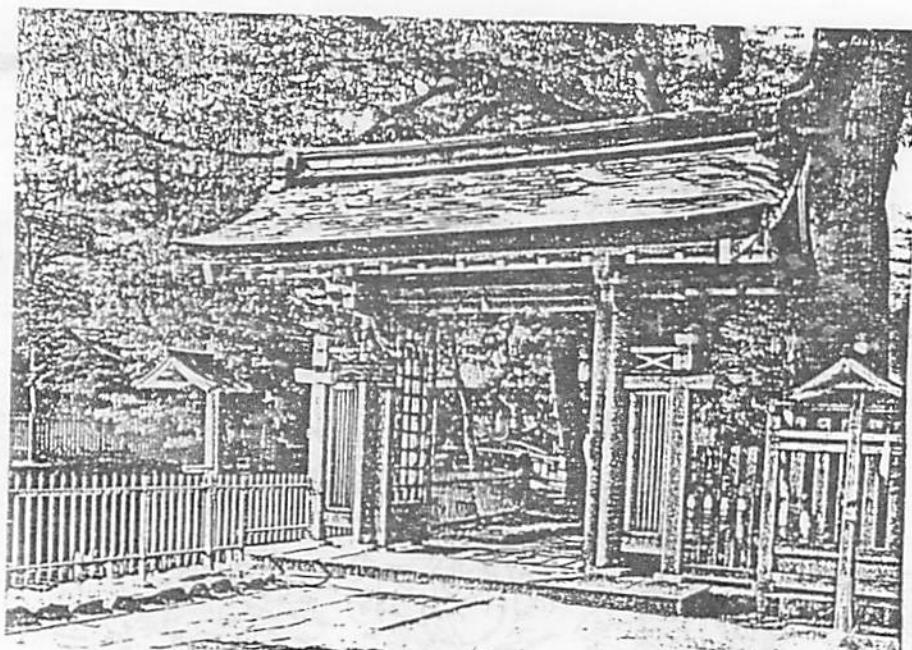
駿日 起請文



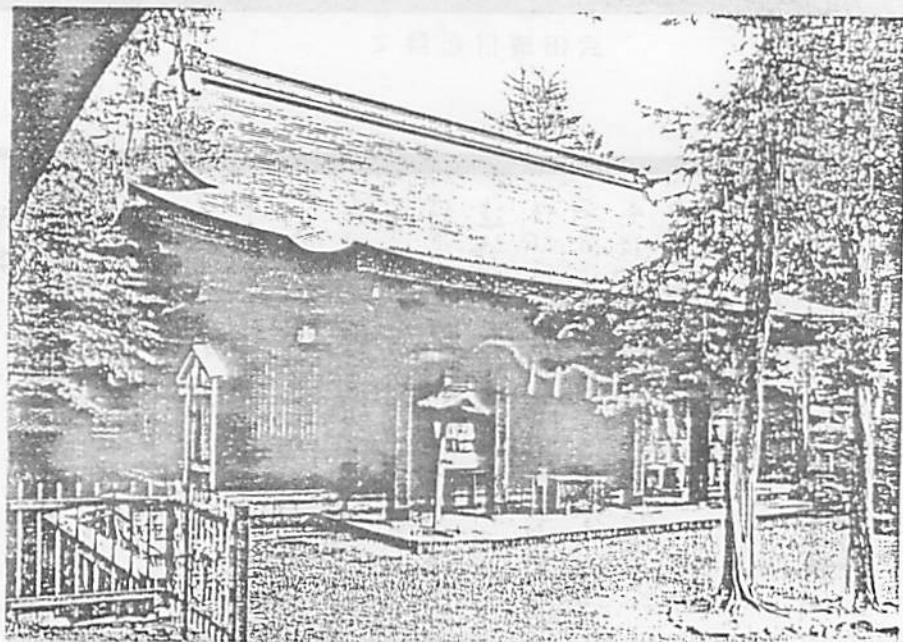
武田晴信起請文



武田信玄願狀



生島足島神社中門

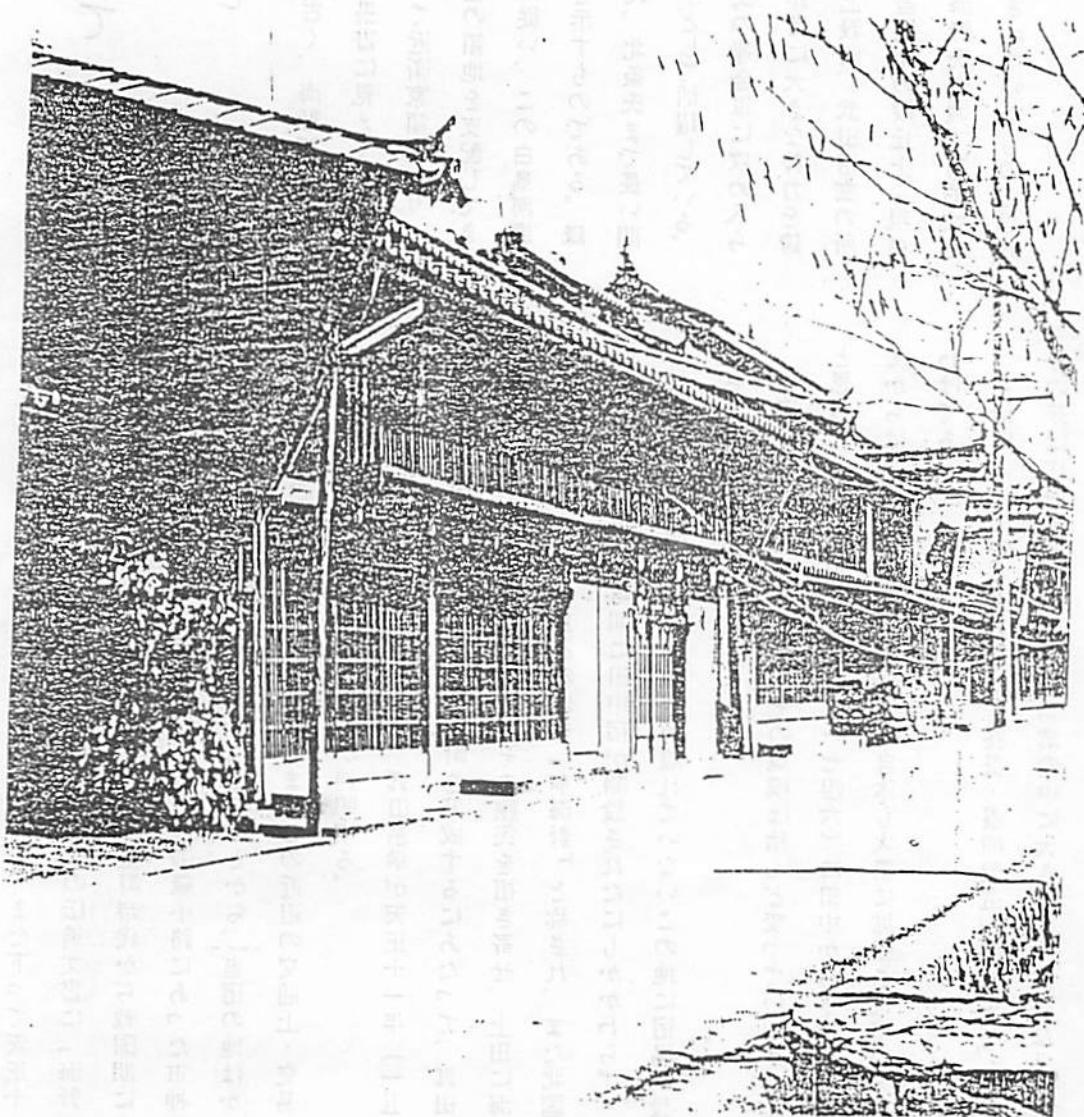


生島足島神社本殿

歴史的町並み

もと うん の じゆく

北国街道 本海野宿



一、本海野宿について

(一) 本海野宿のあらまし

当宿の地は、昔より海野と言われて非常に古く、海野郷として天平頃（七四〇前後）の正倉院御物紺心麻綱墨書に見えている。

その後、莊園制下に入つてからは海野庄として近衛家領となり、南北朝期になるまで続いた。こうした海野庄の領地を支配してきたのは、海野氏であり、海野氏が木曾義仲に従い、この白鳥河原に挙兵した事は、海野氏の力の大なることを示すものである。鎌倉幕府になつても武勇をもつて重く用いられ、北条氏まで長い間にわたって仕え、弓の名人として流鏑の射手として活躍している。

天文十年（一五四一）武田・村上・諫訪氏の連合軍に攻め入ら

れて滅亡するまで、海野氏を中心として、非常に大きな勢力を誇る信濃きつての名族であった。その後、村上義清、武田信玄の所領となる。こうした海野氏の本拠・居館が当宿北の段丘上（現白鳥古墳地）にあることから、当宿の地は、海野氏の城下町的性格をもつて古くから、かなりの集落形成がなされていたものと思われる。

このことは、鎌倉後期文永十一年（一一七四）の高崎円性寺の地蔵菩薩背名に「小県郡白鳥宿住人」とあり、また下つて天正十年（一五八二）以前のものと思われる武田氏の伝馬文書に「海野町」とあることからも裏付けられる。また室町時代から戦国期にかけて六齋市が立つていてこと、当宿の御藏小路にあった市神もこの市の存在を裏付けている。以上のことから、当宿の地はかなり古くから海野氏の本拠として、またこの近辺の交通上・交易上の中心地として栄えていたことが判明する。

こうした背景があつたからこそ、真田昌幸が天正十一年（一五八三）に上田城を焼き、その城下町を形成するにあたって、真田氏にゆかりのある当地海野から、その住民を招き寄せ、上田に海野町を形成して、そのもとの地を「本海野」と称され、また北国街道が開通した慶長年間に田中宿が開設されたにもかかわらず、それからわずか西へ一・六kmしか離れていないこの地に宿場が設置されたのである。

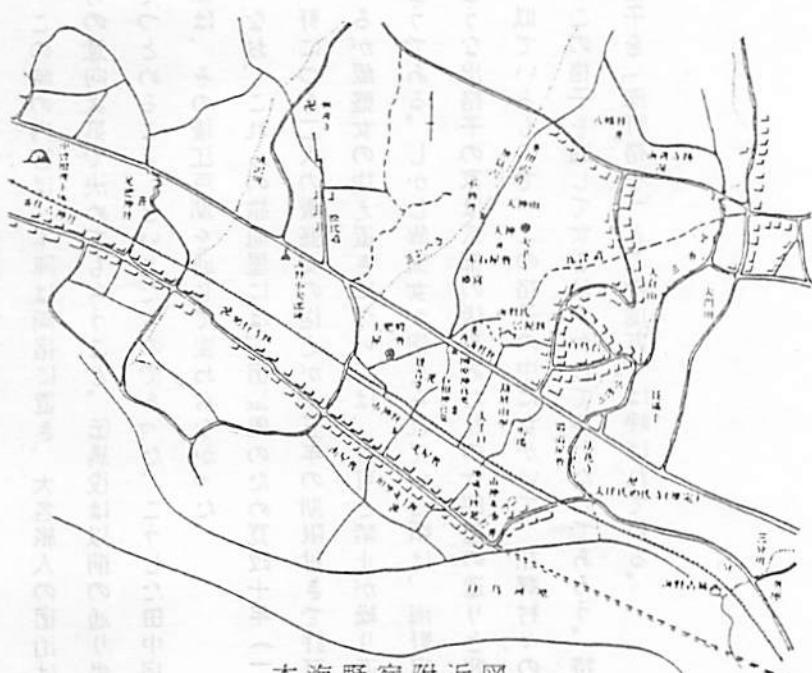
本海野宿は、成立当初からその規模は殆んど變つていなかつたと思われる。それが寛保二年（一七四六）に田中から木宿が移つてからは戸数の増加と関連して宿泊休憩施設も次第に拡張されていったわけである。

明治に入っての本海野では、養蚕・蚕種製造が盛んになつたが、その芽は江戸末期にこの地の副業の中に大きく育つていたとみる。

ことができる。現在の本海野は、道路中央部を流れる用水路、うだつ・格子戸のついた出街構造の美しい家並等、旧北国街道宿場町の景観をそのままに、静かなたたずまいをみせている。このように、本海野宿が宿場町の景観を保ち得てているのは、明治二十一年（一八八八）に開通した国鉄信越線が宿の北側を通り、駅が当地から離れた大屋と田中の地に設置されたこと、また戦後開通した国道十八号線が宿北方の段丘上を通り、いわば近代主要路線からははずれたことが大きな理由として挙げられる。こうした宿場には、近年この地を訪れる観光客・写真家・画家・研究者等の数は、年を追つて増えてきている。

それとともに、宿場町のたたずまいを色濃く残している当地の家並や景観の文化財としての価値を高く評価し、保存を望む声も高まっていることは事実である。

しかし、住民の生活にとって古く大きな家も中央を流れる用水路も次第に不便でやつかいなものになりつつあるのも事実である。したがって、国・県・町等による組織的で抜本的な施策がないかぎり、壊滅は避けられない状況にきているようを感じる。



本海野宿附近図

(二) 本海野宿の成立

本海野宿の成立は、寛永二年（一六二五）と伝えられる。成立当初は、田中宿の間の宿的性格であつたらしく、問屋が置かれ田中宿と半月交代で伝馬の仕事のみ、つとめていた。

ところが寛保二年（一七四二）八月の大洪水により、それまで本宿をつとめていた田中宿が殆んど壊滅状態になってしまった。

この時は東北信濃にかけて殆んどの村々が大被害にあつたが、田中宿の被害は特にひどいものであつたらしく、死者六十八人、負傷者五十八人、流失家屋百十九軒、残つた家は二十九軒であつたと伝えられている。もちろん海野宿もかなりの被害を受けたが、田中宿ほどではなかつたことから本宿が田中から本海野に移され問屋であつた藤田氏が本陣を兼任し、大名の宿泊・荷物の輸送等を一手につとめるようになつたわけである。

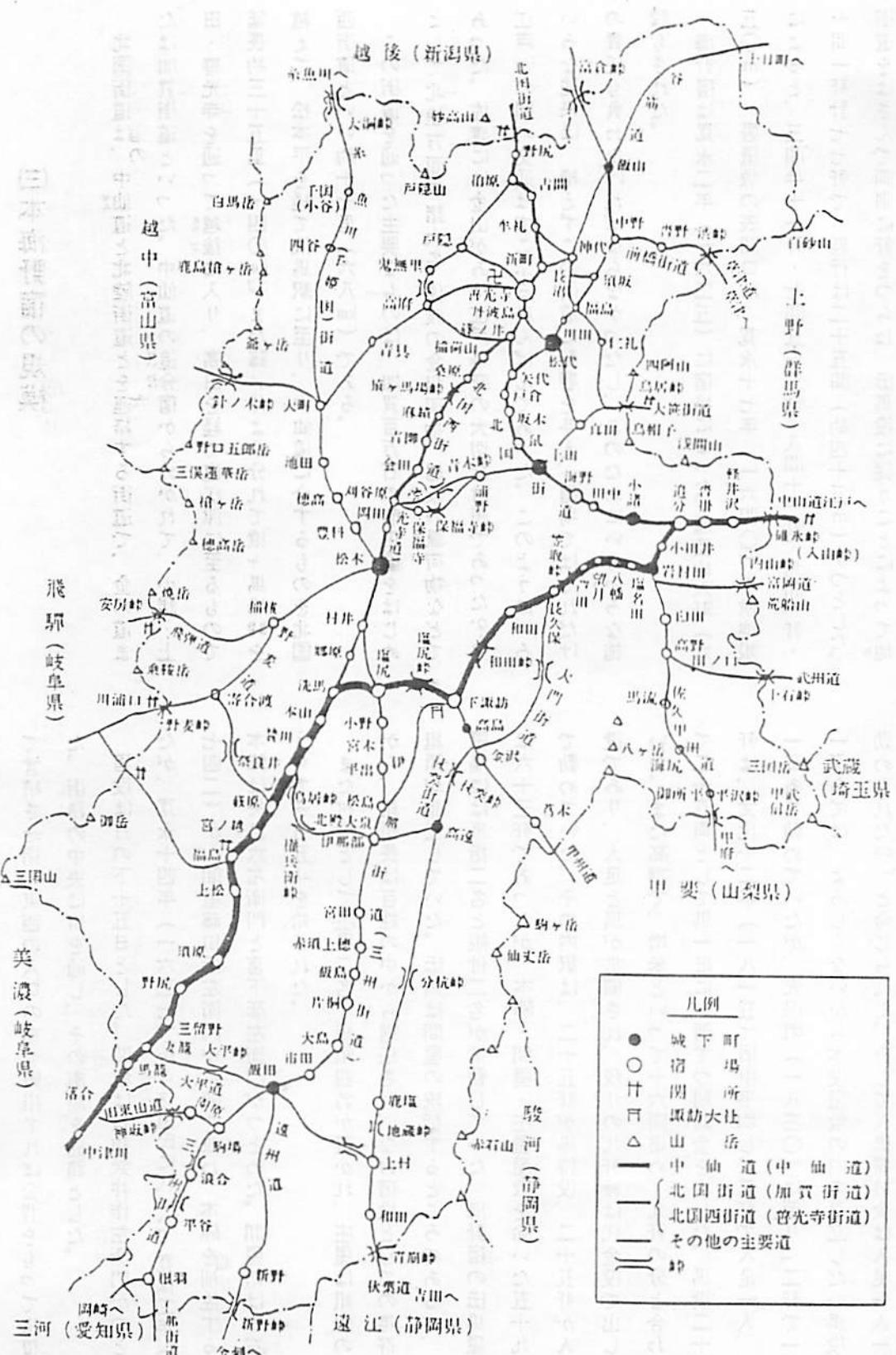
その後、田中宿も次第に立ち直つてきらしく、宝曆十一年（一七六一）田中宿より古米の通り半月交代で人馬の繼立を行うよう

訴えがあり、両宿間で談合が繰り返されたが、海野宿側に古米に戻ることに大きな支障があり不調に終わつた。下つて文化三年（一八〇六）再び田中宿から訴えがあり、双方談合をかさねるこ

と一年余、翌文化四年十一月に上田原町の問屋、田中組の割番等の仲介でようやく決着をみていく。

この時の内容は「本陣は両宿に置き、大名旅人の宿泊は、相手方の意向次第で決めてもらうこと。伝馬役は以前の通り半月交代でつとめること」といつたものであった。こうした田中宿との關係は、その後江戸期を通じて変わらなかつた。

なお、これらの旅籠屋には、宿興のため寛政十年（一七九八）一軒につき二人の飯盛女の抱えが十五年の期限付きで許可されているが飯盛女の抱え置きについては、許可と禁止が繰り返されたようである。しかし飯盛女が抱えられていた頃は、海野宿に見ゆるような出格子の家は京都の伏見あたりの女郎屋の造りと非常によく似ているもので、この格子の中に女がいて、在郷村々の若者達がこの格子を通して女をひやかして歩いたのであろう。特にこの格子を「海野格子」とこの地方では呼ばれている。



(三) 本海野宿の規模

北国街道は、中仙道と北陸街道とを連絡する街道で、金の道または加賀街道といった。中仙道の追分宿から分かれて、小諸・上田・善光寺を通って越後に入り、高田を経て直江津に至るもので延長約三十五里（一四〇km）（また藤ノ井より分れて猿ヶ馬場峠を越えて、松本平を経て洗馬駅に至り、中仙道に合するものを北国西街道といい約十七里（六八km）である。

この街道を通った主要なものは、加賀百万石の前田侯をはじめとして北陸方面の諸大名、佐渡の金銀荷物、越後の臘荷物などであった。佐渡には金山があり江戸幕府の大切な財源であったから、江戸との間の交通はすこぶるひんぱんであった。このようにいろいろな往来は、必ずこの街道に影響を与えた、宿場ではそれだけの責任も負わなければならなかつたし、このためにいろいろな施設もされた。

海野宿は寛永二年（一六二五）に宿場になった。延長約六町（六五〇m）、居屋敷の表間口は、寛永十七年（一六四〇）の検地帳によると、三間半十一軒・七間五十三軒・八間十一軒・九間一軒・十間一軒計七七軒で、裏行は二十五間（約四十五m）ずつとした。

「街道をはさんで両側に軒をつらね、伝馬役に従うことによつて地

子（年貢）が免ぜられた。また宿を並家破損の時は修復費を下げて營繕させ宿の東西の入口の柵も破損すれば公費をもつて修復した。街路の中央に川を通し、その南側を通路とした。

宿役は月の下十五日とした。問屋は当初武井作左衛門がつとめたが、寛永十四年（一六三七）から藤田氏に代つた。寛保二年（一七四二）から問屋藤田伝左衛門が本陣を兼ね、本陣を浦佐する脇本陣は矢島六左衛門と宮下彦左衛門がつとめた。問屋給は本石のうちで一石五斗を給された。

また村役として庄屋二名、組頭四名が置かれ、庄屋は組頭の中から、組頭長は百姓の中から選任され、なお宿役としての年寄は組頭が兼任していた。伝馬は問屋の統括するところであるが、問屋場には馬指二名と帳付二名が常勤していた。海野宿の伝馬屋敷は六十三軒であったが、本陣・問屋・庄屋屋敷を除いた五十九軒で勤めていた。その内訳は、二十五軒が馬持役、二十五軒が人足役であり、人足と馬が常備され、残りの九軒分は代金役で出していた。また高割で、増米といつて十六両集め、九軒の分と合わせて二十五両として馬一疋に一両ずつ補助金を出した。馬役二十五軒は、文化十二年（一八一五）宿中平均して二軒で人足一人、馬一疋あて勤めていたが、天保頃（一八三〇）に至り「二軒で一人、一疋あては、ようしくないから本役屋敷の内で見立したい馬役を勤められたい」と命じられた。そして人馬雇料金は人足一人一両

一分、馬一疋二両二分であつた。

幕末になると人馬役を請負で雇つてやらせたが、道中奉行としては伝馬役相続のために相続援助の坡下金などを出すのだから雇入馬や請負世話役をすることはよろしくないと指示したが、実際には行なわれなかつた。寛永十九年（一六四二）の荷物は普通一駄が小諸へ七十五文、上田へは五十文であつた。天保三年（一八三二）町中総家数百十一軒で、昼夜の火の番は八人ずつ家別に勤めた。本陣・間屋・庄屋二人は諸役儀諸夫錢は全部免ぜられた。年寄は組頭を兼任し、諸人夫小役は免ぜられた。

明治十一年（一八七八）の調査によると、養蚕兼農業石三十五戸、工業七戸、商業一戸、僧一戸で農業余暇では蚕種二十八戸、質屋一戸、酒造一戸（受壳三戸）製糸二戸（受壳十戸）茶屋二戸、料理屋三戸、旅館十戸、魚夫六戸、タバコ屋一戸、水車屋七戸となっていた。



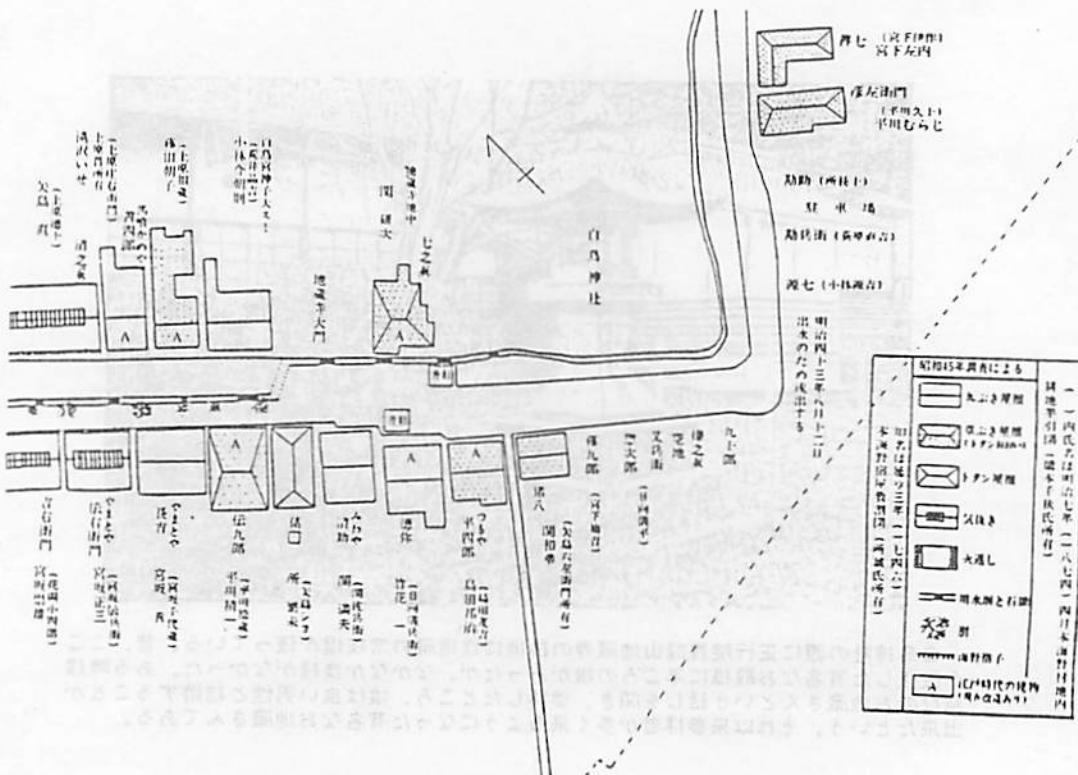
白鳥神社の西に正行院青龍山地蔵寺の跡地に隣地蔵の常夜燈が残っている。昔、ここを往復した有名なお殿様に年ごろの娘があつたが、なかなか良縁がなかつた。ある時縁結びのお地蔵さんという話しを聞き、参拝したところ、娘は良い男性と結婚することが出来たといふ。それ以来参拝者が多く来るようにになった有名なお地蔵さんである。

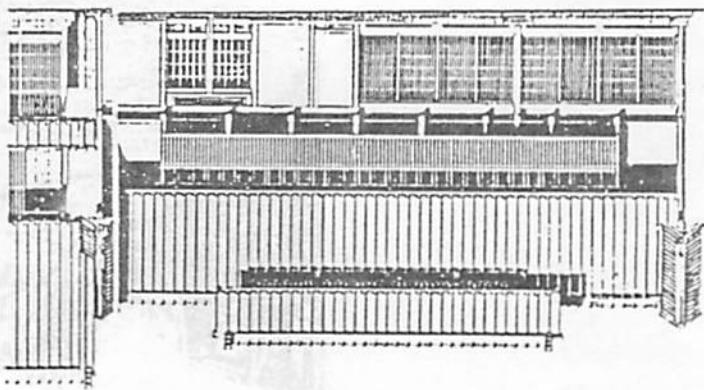
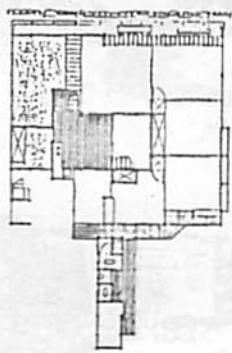
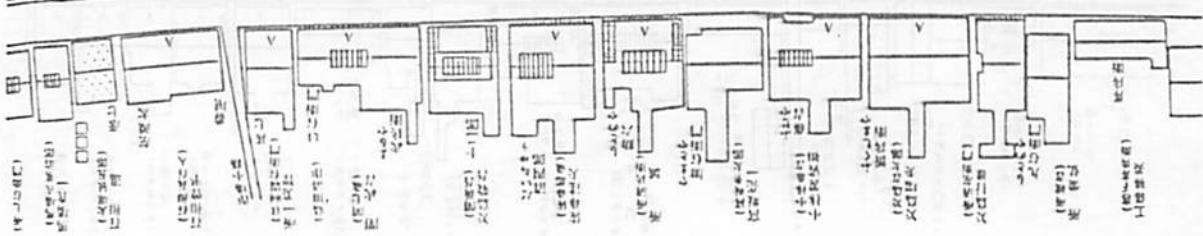
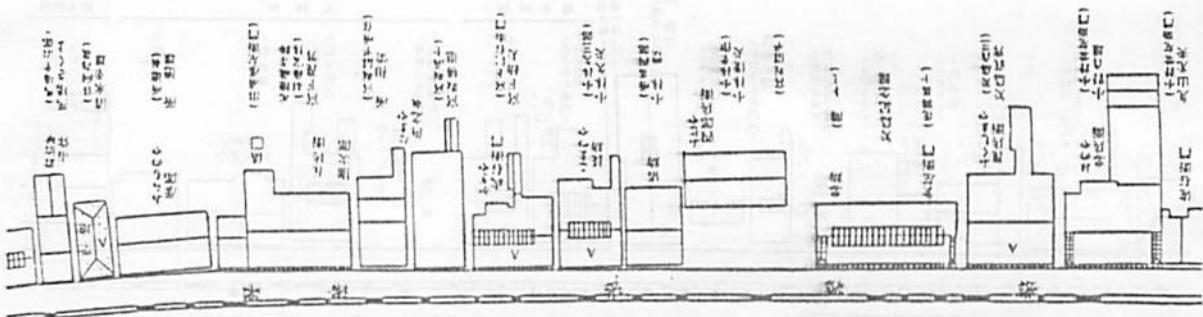
(四) 本海野宿の町並み

宿場の東西端の地形の石垣は明治初期に撤去されたが、街路の屈曲線は残っている。街道の中央を流れる用水の堰はそのままであり、また宿駅としての地割がよく残っている。信越線は地割の北側に布設されたのが幸に地割の裏道は今も通行できる。用水にかかる六十余の石橋も古い位置にあり、用水に沿って柳・かえで・松などの並木が樹をそえて、古い宿場の態様が保存されている。

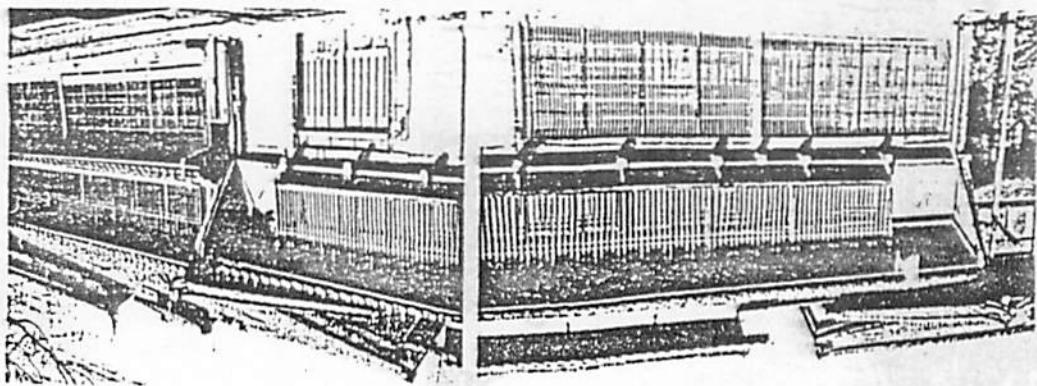
街道に沿って九十五棟の民家が並び、このうち五十五棟は宿場時代の建物で、そのうち二十五棟は二階建て、出桁造りは七棟である。明治以後新築の四十棟の大部分は明治期のものであつて、蔭蓋のために棟に煙抜きの小屋根を設けたものが多いので、宿場の風格を承けついで、江戸期のものとよく調和している。

中心地には堂々たる二階建が多く、出桁造り、隣家との境の防火壁（火まわし又はうだつと呼ばれている）や構えの上下階の格子張り、また板葺き石置きであったが、瓦葺きに改められているゆるい傾斜の屋根などは、江戸期の旅籠屋風そのままに残されていて、いずれも家号をもって呼ばれている。本陣は門長屋の一部を残すのみで、脇本陣は一つは改築、一つは撤去されている。





工厂时代的木工刀具与现代的锯割机子比起来，有方木用油锯快的锯掉，更慢的可能为锯掉。

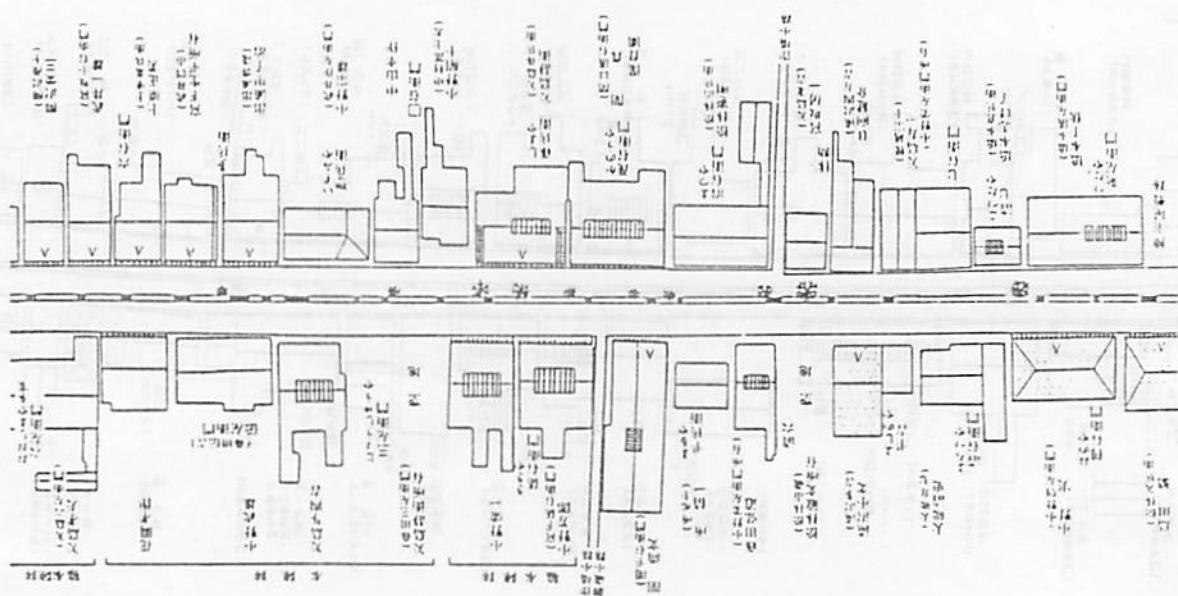




今から60年前大正末期頃白鳥神社の樹形から西方

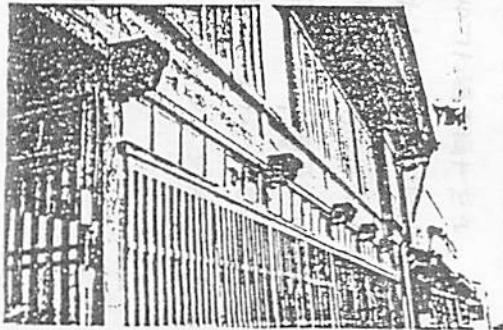


今から60年前大正末期頃松代道辺から東方

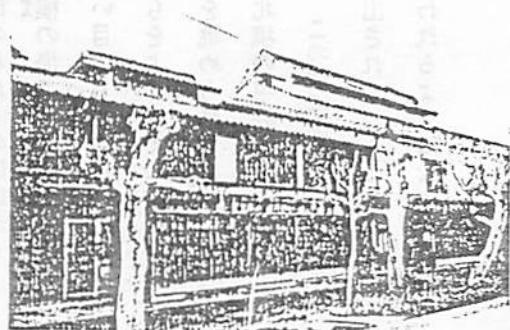




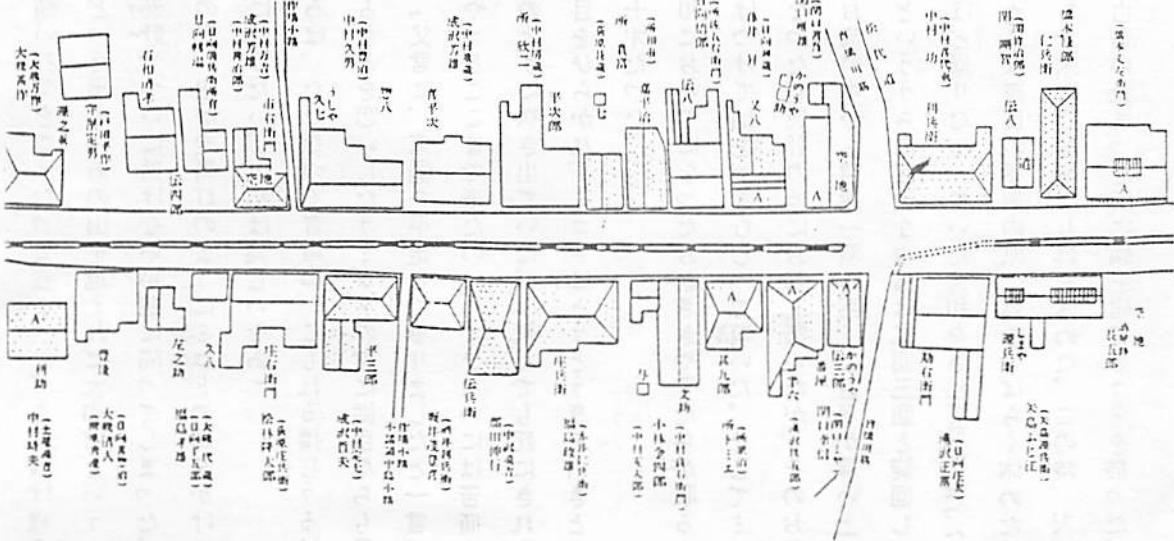
今から60年前大正末期頃松代道辺から西方



出染の木鼻様形



木うだつを持つ江戸時代の旅籠屋、右方は明治時代の塗籠造の蚕室に小屋根を持つ建物



二、日本武尊と白鳥神社

いに、不覚にも手痛い打撃をこうむってしまった。この負け戦さから長年の心労がどうと出て、あの山を越えれば大和だという一步手前の鉢鹿の能郷野でついに動けない事態に陥ってしまった。苦難に満ちた戦いの思い出が走馬灯のようにミコトの胸をかけめ

ぐり「ああ、大和に掃りたい、大和は美しいなあ」

「倭は國のまほろば、たなづく青垣山、こもれる霞しうるは
し」こういつてふるやうとを恋いしたつミコトの声に從臣たちも田
がしらを押えた。「父君に、東國を平定して参りましたと一言だ
けいいいためにやつとここまで来たのに…」ひたいには苦痛を
こらえゆ油汗が玉のよう吹き出でいた。「死んでも死にきれな
いなあ」とカツと田をひらかれ、ミコトはとうとう息を止めたとい
た。御歳わずか三十才だった。

しづめよつと弟橘姫が入水するといふ悲しい目にあつた。この
よつに苦心慘胆、まつろわぬ東國のものどもをよつやくに討ち平
らげ、その帰途、島居峰に立ち、相模の方を眺められ、入水した
姫を忍んで「吾妻者邪」と三回叫ばれて（北境の現群馬県吾妻郡
嬬恋村の地名がつけられた）信濃国に入り、この地に滞在されて、
近くの小さな海を見て、相模の海難を思い出されて、「この海も
野となれ」と感じられた。（のち海野と言われるよつになつたそ
うだ）

その後、大和へのがいせんの帰途、伊吹山の荒ぶる賤民との戦

これが白鳥神社だといわれている

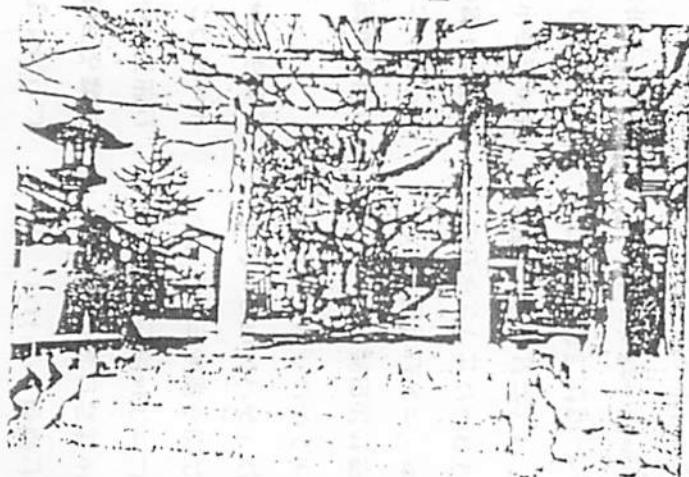
(古事記)

その後海野・真田氏と巨大な神領が寄附され、盛んに祭礼を行つて来た。文化五年（一八〇八）八月には音電為右衛門奉札し、四木柱土俵を奉納され、若者の奉納相撲が昭和五年頃まで続いた。



日本武尊海野へ

白鳥神社



白鳥神社古図



五、平将門と善淵王

だらうまきかど

そじゅわ

平貞盛は平将門が反乱を企てておると、時の政権をバックにして、ライバルの将門をたおそうと考えていた。さらに将門が製鉄所をつくり、武器や甲冑を製造して、反乱を企てていると朝廷に訴えようとしたものであろう。地方に居つて、醜い争いのまきぞえを食うよりも、将門を中傷するため上京し、それをきっかけに立身出世をしようというものであった。

そこで平貞盛は、承平八年（九三八）二月中旬東山道を京都に向けて出発した。これを聞いた将門は、百余騎の兵をひきいて、まだ碓氷峠には嚴雪のある季節これを蹴ちらして峠を越え追撃した。当時の東山道は小諸・海野・上田を経て、そこで千曲川を渡り浦野・保福寺峠と過ぎて松本にはいるのが順路であったが、貞盛はこの経路をとり、小諸の西、滋野の總本家の海野古城に立ちよって、善淵王に助けを求めて来た。

善淵王と平貞盛との関係は、貞盛がかつて京都で左馬允の職にあった時信濃御牧の牧監滋野氏と想定であった。

この滋野氏は信濃の豪族で「続群書類從」によれば海野氏の祖である。

また、以前に将門上京の際、貞盛の依頼によって宇治川に布陣、将門を亡きものにしようとした縁故がある。この協力を謝し、再び、ここでその厚意によつて、一思つこうとしたものであつた。

貞盛が海野に助けを求め、海野古城に滞留していることを知った平将門は先まわりして信濃國分寺付近に待機して、神川をはさんで千曲川合戦が行われたのである。この日は冬まだ寒い二月二十九日のことであつたといわれる。この戦火で旧信濃國分寺が焼失してしまつたという。貞盛方上兵地田真樹はこの時矢に当つて戦死、この他田氏は信濃國造の子孫であるとしているから、郡司として国府にあり、貞盛の危急を聞いて、一族郎党をひきいて応援にかけつけたものであろう。従来この上田には国分寺のみあり、国府は松本に移っていたという見方がある。貞盛は遙々山中にのがれ、将門は空しく引きあげる。

「千たび首を搔きて空しく瘡色に通りぬ」

平将門

旅の糧食を失つて飢と寒さに悩まされ、やつとのことで京都にたどり着いた貞盛は、太政官に訴え出ており、将門に対する召喚状が出される。

善淵王は真言宗に深く信仰があり、寺を建立した。貞保親王を葬め山陵に葬り、神として奉祀した（これが四之宮極現である）

天慶四年（九四一）一

月二十日亡なれ、善

潤王の法名（海普寺殿

滋王白保大禪定門）を

取つて海普寺と称した。

その後天正十五年（一

五八七）頃、領主真田

豊幸の時に至り、上田

城より丑寅の方が鬼門

に当るを以て、本寺を

現今地に移し再建し

て上田城の鬼門除とし

た。
（一）（甲）前代の三

真田信之が元和八年（一六二二）松代西条

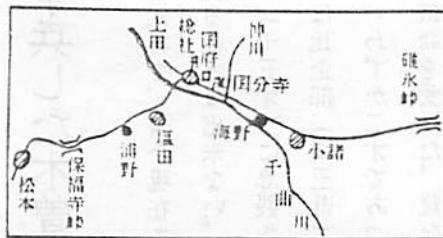
にこの寺を移し、開善

寺と改め白鳥神社の別

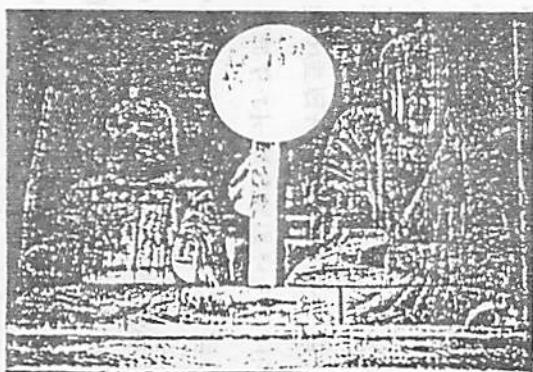
当とした。また北御牧

村下之城の両羽神社に

善潤王の木像が安置さ



国分寺附近図



両羽神社内の右普瀬王 左ボッカイのダッタン人の木像



平 将 門

六、白鳥河原に挙兵した木曾義仲

旭將軍木曾義仲は信州を代表する武将で、爾今現在まで義仲の如き、偉大なる人物を残念ながら見ることは出来ない。

義仲の父源義賢は甥の悪源太義平（十五才）に急襲されて討死した。時に義賢の次男（後の義仲）は比企郡（埼玉県）大倉館で久寿元年（一一五四）生れて間もないわずか二才であつた。崩山重能に命じさがし出して必ず殺せと讃命を受けた。難なく母子を捕えられたが二才の幼児を討つことができなかつた。斎藤別当実盛に助けられ、それから信濃の木曾谷の土蔵中原兼遠にこの駒王丸母子は預けられるのである。駒王丸は、中原兼遠のもと、木曾谷ですくすく成長した。既して義仲と名のり、兼遠の子の樋口次郎兼光や今井四郎兼平らを家来とし、武将としての修業をした。またその娘をめとつて、義高・義基の二子をもうけた。

治承四年（一一八〇）義仲は二十七才を迎えた。以仁王の発した平家追討の令旨は、山伏に変装して、平家の目をくらまして、都を脱出した源行家によつて諸國の源氏のもとに伝えられた。源頼朝のもとでは、四月下旬に、木曾の義仲へは五月上旬に到着した。

義仲が、平家討伐の旗挙げを木曾谷の八幡社でしたのは、その年の九月、二十七才の秋であつた。かくて、十月には、義仲は上野（群馬県）に進出した。上野国多胡郡は、二十数年前までは、亡父義賢の本拠地であつた。上野の地は短期間に殆んど勢力圏に

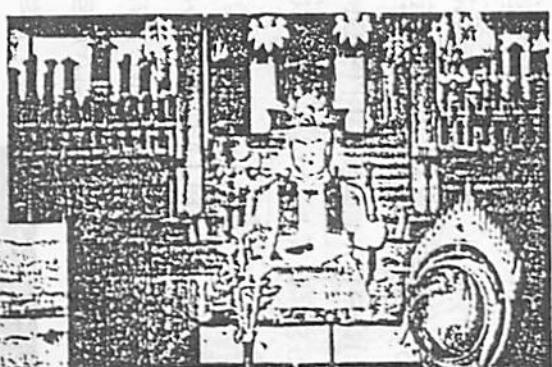
収めることができた。しかし、約二ヶ月の滞留の後、軍を信濃に帰したのである。上野から下野の武藏など、これ以上に進出することは、従兄の頼朝を刺激することになり、加うるに大賀族として越後から出羽（秋田・山形）にかけて、偉大な勢力の平氏一族の城氏が義仲を討たんとして、北方から信濃に侵入の機をうかがつていたからである。軍を直ちに信濃に還した義仲は、おそらく依田城（丸子町）に入りその年の正月をそこで過したのであろう。あくる治承五年春、城四郎助茂は全兵力を集め、六万を率いて信濃侵入を開始した。信濃国境を突破した平家の先鋒城軍は難なく善光寺平に進出して來た。一方、木曾義仲は信濃小県郡の白鳥河原に三千余騎の軍勢を集結したのである。それは治承五年（一一八一）夏の六月十日前後のことであつたであらう。白鳥河原で全軍の馬首をそろえたのは、木曾の樋口兼光・今井兼平・木曾中太・弥中太・柳井達・柳井達・大庭太郎・林津神平・林津貞行・信貞・忠・落合兼行・桜井太郎・大庭太郎・林津神平・林津貞行・信貞・

親・弥平四郎幸広それに上野、甲斐などにいた源氏の将が加わった。

東信濃の武士たちは、新張牧・望月牧・塙河牧の中心勢力者で騎馬の技術は、戦闘に進軍に予想外の威力を發揮したものであろう。白鳥河原への裏結は交通の便もさることながら、義仲の旗上げに力のあつた長瀬氏の近くで、しかも集まりやすいということと、広大な河原であり地元の豪族海野一族の勢力があつたと見ることができる。白鳥神社に戦勝祈願参拝、海音寺に先祖代々の靈に出陣の報告をし白鳥河原を後に出陣し、さつそつと千曲川の流れにそつて横田河原に到着した。合戦は六月十四日朝八時頃、木曾方の奇策により平家のしるしとなっていた赤いのぼりを持つ兵を横手から近づけたら、平家方は味方がふえたと喜んだので、やにわに源氏の白いのぼりを振りかざして攻めつけたので、大敗した城氏は奥州へ逃亡した。木曾義仲は、初の大勝をかち得、つづいて伊豆加羅の戦と、つぎつぎに勝利をおさめ入京をはたし、旭將軍の称号をうけ征夷大將軍に任せられた。

承永三年（一一八四）一月宇治・瀬田の戦いに破れ栗津に戦死した。海野氏九代海野弥平四郎幸広は承永二年十一月備中水島の合戦で、木曾義仲の大將軍として討死、また弟海野幸長（のちの大房覺明）は義仲の祐策として活躍した。この覺明こそ「平家物語」の語り手の一人ではないかといわれる。また白鳥庄に康樂寺を建立しておる。海野氏は義仲勢が滅びても騎馬武者の生命は衰えることなく頼朝をはじめ北条・足利・真田氏等に仕え騎馬弓射の道に長じた。

白鳥河原、真中の林は白鳥神社（九子町より）



木曾徳音寺の木曾義仲等身大像

落した。

七、武田信玄と海野氏

林津元直は晴信の妹が妻であることと、諏訪神社の神官と縁をもつんでいたので特に許され、望月氏は武田軍に降伏した。

天文七年（一五三八）六月、北条軍との和議が成立して三年間は武田信虎は珍しく平穡が続いた。天文九年五月、二十四才で諏訪氏を離れた頃に信虎は娘の林々（晴信のちの信玄の妹）を十ヶ月に嫁がせている。

信虎が最後の合戦を飾ったのは四十八才の天文十年（一五四二）の晩春に始まつた信州の「佐久攻略」であった。晴信二十一才の初陣説はこのあたりから出ている。「甲陽軍鑑」「武田三代軍記」などでは信虎・晴信父子の奮戦ぶりを克明に描いている。信虎軍は一日に三十六の城を攻め落としたと伝えている。

武田信虎軍は佐久を通つて、現在の白樺湖に近い大門峠を降り、諏訪・須坂は下諏訪の和田峠から山づたいに、村上義清軍は戸石城で兵力をそろえ、いずれも血に飢えたような連合軍で戦闘をいどんだ。折りからの雨期に大雨が続いて戦場は水びたし、川はあふれておぼれる者さえ出る中を滋野三家の前衛とする城は次々とたたかれた。双方の主力がぶつかりあい、防衛軍は歯を食いしばつて戦つたけれど、五月十三日に尾野山（現丸子町）の城が落され、翌日海野平（現白鳥台団地）を占拠され、海野城の本拠は陥

のち天文二十二年（一五五三）有名な上杉謙信との川中島の戦いとなる。

その後永禄四年（一五六一）海野氏の家名を滅すことは心ならぬと、信玄の第二子次郎信親は〔母は三条内大臣公頼女で、天文七年（一五三八）生まれで、盲目のため髪をたくわえず別館にいた。居跡は城北の聖道小路。時の人お聖道様という。又四男が勝頼で、五男が仁科五郎盛信である〕海野幸義公の女子を妻として、

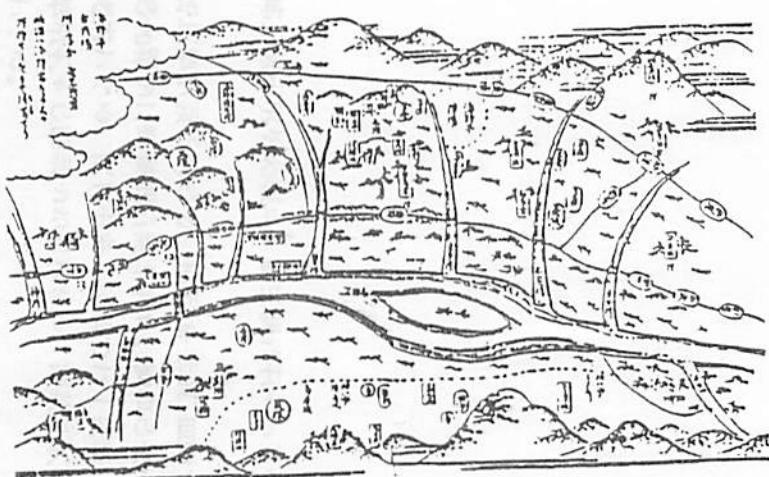
海野氏部承龍と名乗り海野氏を離れたといわれている。海野の

旧臣八十騎の将となり、性格は穏やかで慈しみ深く、人々から敬愛され、龍王の陣代として小草野若狭守隆在に百貫から十倍の千貫を与えた家老（のち奥座）をつとめさせた。

天正十年（一五八二）三月十一日武田勝頼・信勝父子が天目山に敗死を聞き、城南畔村（現甲府市住吉町）入明寺内で自刃した。（年四十二才、法名長元院殿秋潭竜芳大居士）その子頃了道快は甲府長延寺に隠れ織田信長の目を逃れた。その子信正は赦免され、その子信興は江戸時代高家（大名に準ずる格式を与えられ、朝廷に対する儀式をつかさどった）の衆に列し、子孫武田家を伝承して十五代目武田昌信氏となり、東京世田谷に現存して居られる。



武田晴信に招応する
真田幸隆之図



海野平之古図

海野城

小県郡東部町海野

海野城

滋野氏の祖に関する諸説は確定していない。滋野幸俊が望月の牧の牧監として任につき、息子信濃介幸経が海野庄の下司となつた。

海野小太郎幸恒(幸経)の長子幸明は海野氏を継ぎ、次子直家は補津氏を、三子重俊は望月氏を称した。五代後の幸親の子幸広は源義仲に属し、養和元年(一一八一)、白鳥河原の陣、横田河原の合戦に参加した。のち備中水島の戦いに矢田義清とともに先陣をうけたまわり、平家の武将平教経と戦ったが敗れて討死した。幸広戦死のうを弟の幸氏が継いた。

建久四年(一一九三)、曾我兄弟の仇討で有名な富士の巻狩りに信濃からは海野小太郎幸氏、藤沢二郎清近、望月三郎重澄、補津次郎らの名前が見られる。承久の乱(一一九一)の時は東山道の将武田五郎信光に属して出陣している。幸氏の孫幸春の代にその弟達が東筑摩郡に移り住んで大いに勢力を伸ばした。

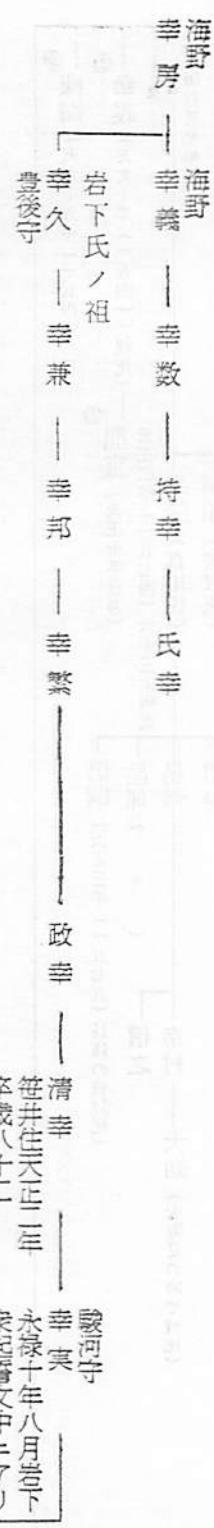
南北朝時代の正平七年(一三五二)、新田義宗、義興らが南朝方として兵を挙げ、滋野一族もこれに加わり宗良親王を奉じた。尊氏と小手差原で戦い勝利を得たが、笛吹峠(碓氷峠)の合戦で敗れ、親王を奉じて退いた。応永七年(一四〇〇)、海野幸義は一族三百騎を率いて村上満信に属し、信濃守護職小笠原長秀と戦った(大塔合戦)。天文十年(一五四一)五月二十五日、海野平一帯は武田信虎、諫訪

頼重、村上義清連合軍の攻撃を受け、さんざんに敗れ、海野氏二十八代棟綱は関東に走り上杉氏を頼ったが、弟の幸義は神川の戦闘で討死した。ここに海野氏の正系は断絶し、生島足島神社起請文に海野衆として記されている。

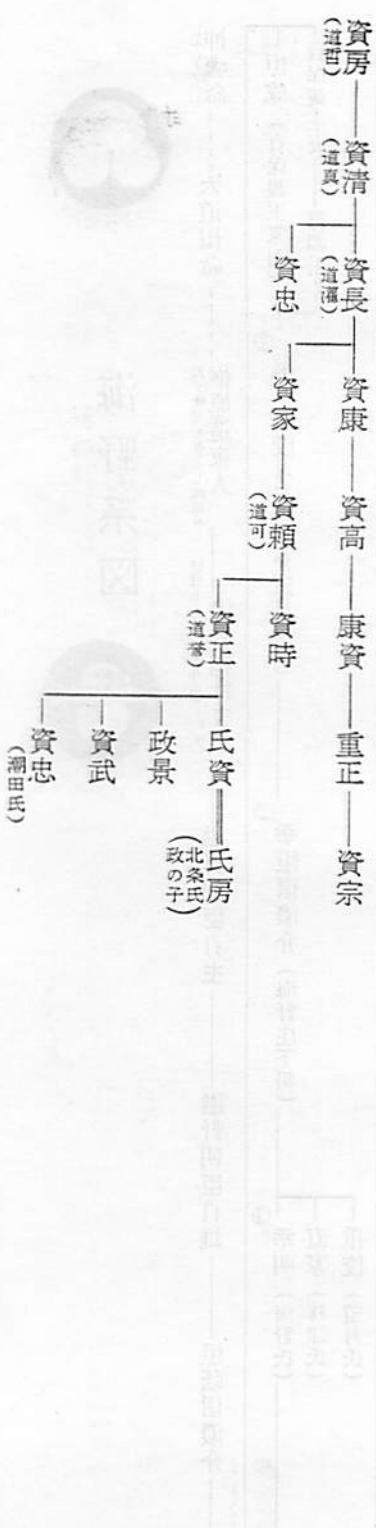
この海野城は海野氏代々の居城とされており、築城年代は延長五年(一九二五)といわれている。天又十年、落城して一族離散してから武田信玄は海野の名跡を二男竜室に継がせた。盲目の人海野竜室も天正十年、勝頼が田野で滅んだのち、古府(甲府)で自害したといふ。

この竜室の孫が再び武田氏を名乗り、徳川家に仕えている。

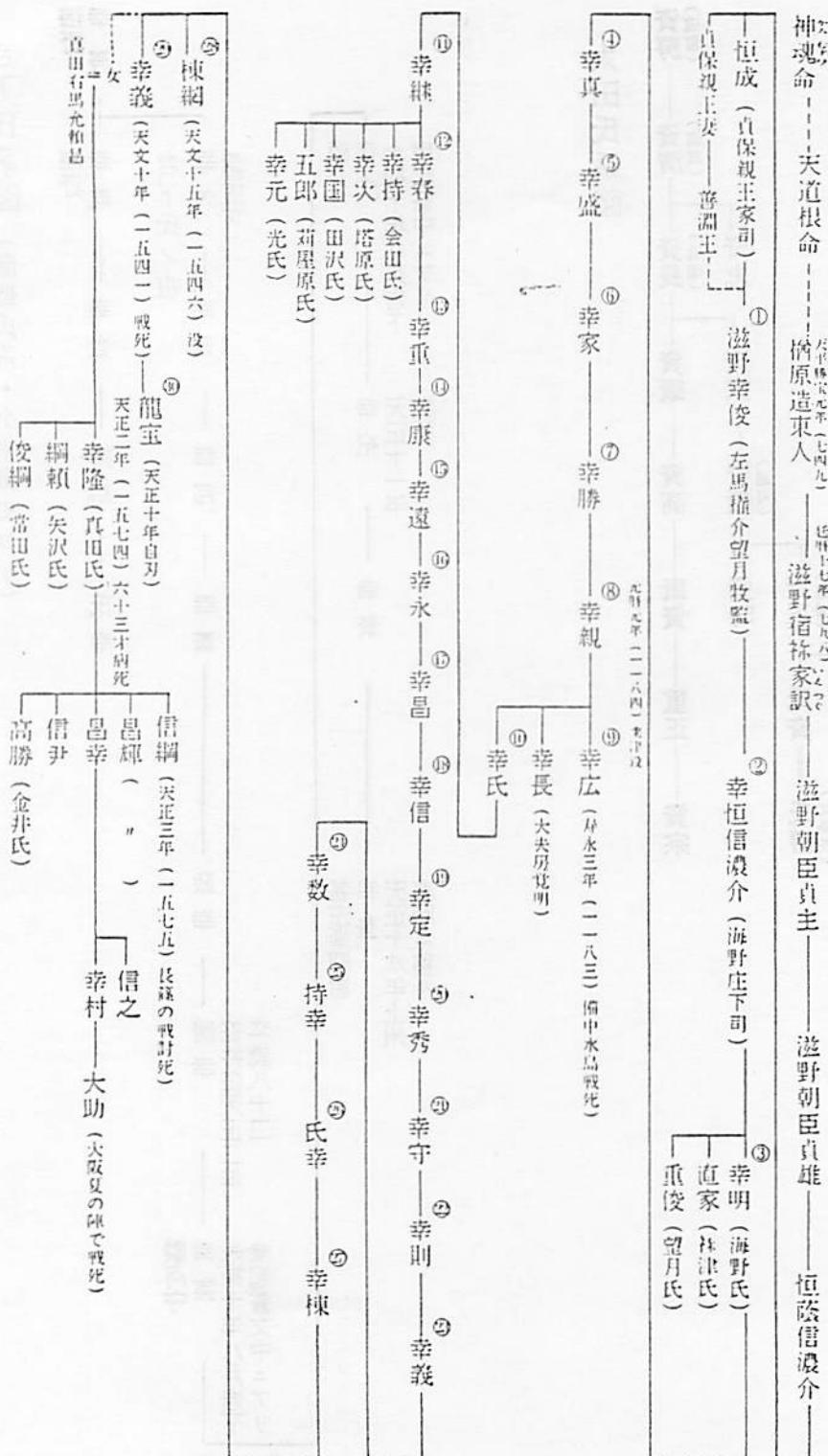
岩下氏系図（海野氏系・小県郡史ヨリ）



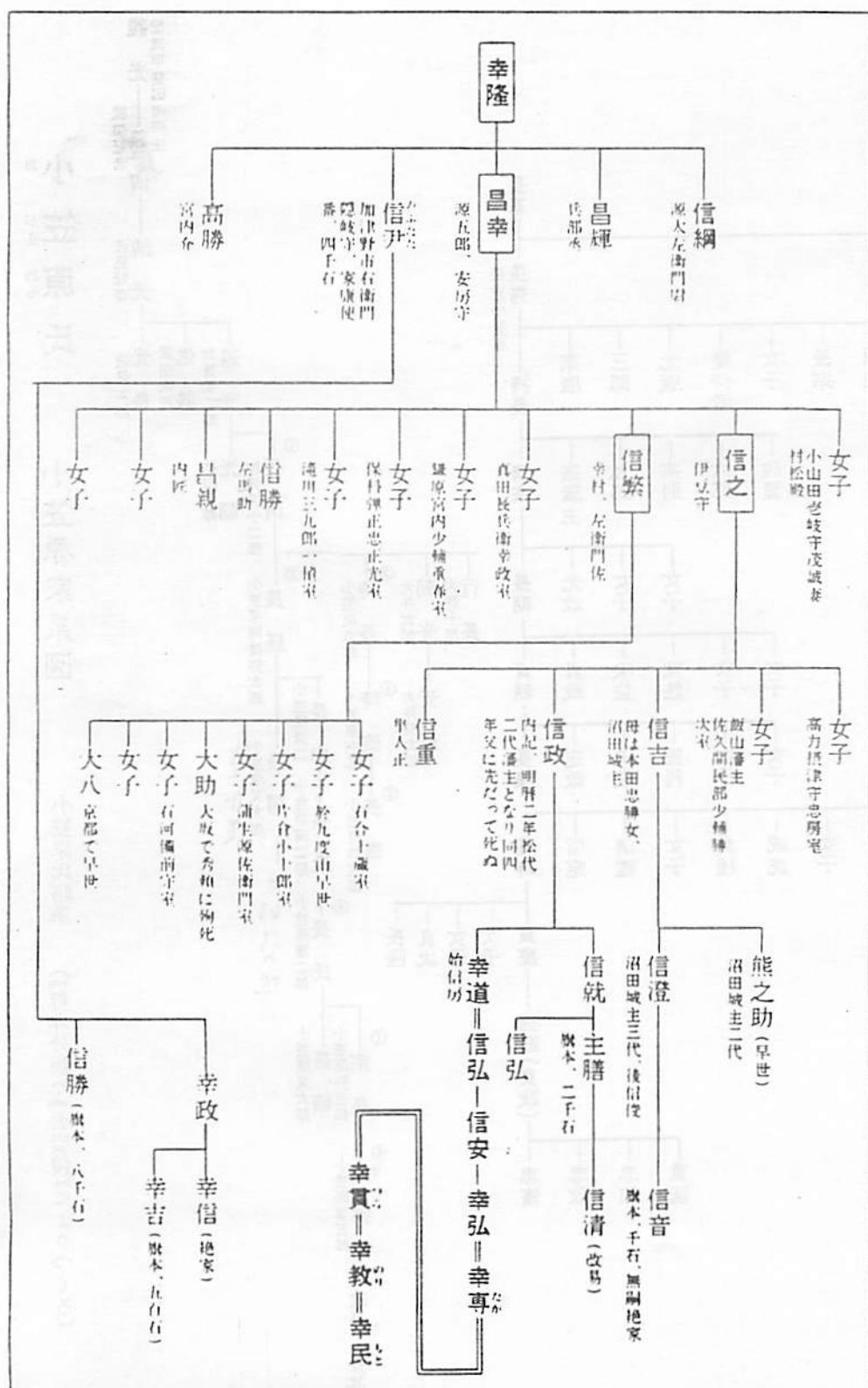
太田氏系図



海野系図



真田家略系譜



小笠原氏

小笠原家系図

小笠原氏略系

(『尊卑分脈』・『吾妻鏡』によりつくる)

